【字義】 ○疾病、病氣が篤い○門人、孔子の門人○病間、少しよくなつた時○無寧むしろ、願ふ意○大葬、君臣の禮を以て葬る。

【義解】 孔子の疾が篤かつた時、子路が孔門の人人を臣とさせた。それは孔子は以前には家臣があつたが今はないので、その死するに當つて庶人の禮しか用ひられないことになるからわざと家臣たらしめた。すると疾が少しよくなつた時、孔子が曰ふには、由は詐(いつはり)を行ふこと久しいことよ。我に臣なきを臣ありとなすのは、之れは人を欺き、天を欺くことになる。吾誰を欺かうや、又天を欺むくやうな事はしようか。その上かりの家臣の手によつて死ぬより門人の手によつて死にたく思ふ。たとひ立派な君臣の禮を以て葬られなくとも、道路に行き倒れて死ぬやうなことはないであらう。

子貢曰、有美玉於斯、韞匱而藏諸、求善賈而沽諸。子曰沽之哉、沽之哉、我待賈者也。

欠

【讀方】子貢曰く、美玉斯にあり、匱に韞めて之を藏せんか、善賈を求めて之を沽らんか。子曰く、之を沽らんかな之を沽らんかな、我は賈を待つ者なり。

【字義】○韞匱、韞は藏む、匱ははこ○善賈、よい買手○沽、賣る。

【義解】子貢は孔子が出でて仕へないのを見て其の眞意を知らうと思つて譬喩を以て尋ねた。ここに美玉があるとするに、之を箱に入れてしまつておきませうか又はよい買手を求めて賣りませうかと。孔子答へて曰く、賣るがよい、但し私は自ら賣らんとするのではなく、よい買手の來るのを待つてゐるのであると。蓋し仕へんと欲するが自ら屈し自ら求むるを非とする意である。

子欲居九夷。或曰、陋如之何。子曰、君子居之、何陋之有。

【讀方】子九夷に居らんと欲す。或ひと曰く、陋し之を如何。子曰く、君子之に居る、何の陋しきことこれあらん。

【字義】○九夷、東方の夷に九種ありといふ○陋、風俗の惡いこと。

【義解】孔子が志の行はれないのを歎じて東方の夷の國に移らうと思つた。或人の曰く、九夷は風俗卑陋で君子の居るべき地ではないと。孔子曰く、德ある君子がその地に居れば自然と德化して善良なる民となすことが出來る、何ぞ風俗の惡いことを心配しようかと。

子曰、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。

【讀方】子曰く、吾れ衛より魯に反る。然る後に樂正しく、雅頌各其の所を得たり。

【字義】○反、立ち歸る○雅頌、雅は詩の大雅小雅で朝廷の音樂に用ひ、頌は詩の頌で宗廟の樂に用ひる。

【義解】孔子晩年、哀公十一年に衛から魯に歸つた。その頃周の禮は魯に在つたが尚缺損してゐたから、孔子は諸國を巡る間に詩樂を調査された。そして魯に反つた時に之を改め直したから、雅も頌も各其の宜しきを得るやうになつた。

子曰、出則事公卿、入則事父兄、喪事不敢不勉、不爲酒困、何有於我哉。

【讀方】　子曰く、出でては則ち公卿に事へ、入つては則ち父兄に事ふ、喪の事に敢て勉めずんばあらず、酒の困を爲さず、何ぞ我に有らんや。

【字義】　○公卿、公は三公、卿は九卿○不爲酒困、酒のために取り困さないこと。

【義解】　孔子曰く、外に出でては三公九卿に仕へ、家に入つては長者に事へ、喪の事は怠ることなく、酒をのんで取り困すやうな事なくする。此の四は日常の守るべき所であるが、私はまだ之を十分に行へないと謙遜された。

子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。

【讀方】　子川の上に在て曰く、逝く者は斯くの如きかな、晝夜を舍めず。

【字義】　○逝者、歲月光陰○舍、止める。

【義解】　孔子川のほとりに立つて歎じて曰く、逝くものはすべて此の水の流るる如くであつて、晝となく夜となく少しも休む時なく流れてゐる。光陰も亦かくの如く一度去つてはまた歸らぬものである。

子曰、吾未見好德如好色者也。

【讀方】　子曰く、吾れ未だ德を好むこと色を好むが如き者を見ざるなり。

【義解】　孔子曰く女色を好むは人情であつて、德を好むことこの色を好むが烈なものを未だ見たことがない。

子曰譬如爲山、未成一簣止、吾止也。譬如平地、雖覆一簣、進吾往也。

【讀方】　子曰く、譬へば山を爲るが如し、未だ成らず一簣にして止むは吾が止むなり。譬へば地を平ぐるが如し、一簣を覆へすと雖も、進むは吾が往くなり。

【字義】　○爲山、山をこしらへる○簣、竹で造つた土を運ぶ器モッコのこと○平地地面の凸凹を平かにする。

【義解】　人の道德に入るは譬へば山を作るがやうで、殆んど出來上つて今一モッコといふ所で止めてしまふのは、自ら止めるので、かくすればその功は全くすることが出來ない。之れに反して地を平らかにするに一モッコの土を低地に覆して、その仕

事に一歩を進めたのである。かくの如くであるから、始めたならば中絶せず、一歩でも進めば、成功に近づくのである、故に怠つてはならない。

子曰、語之而不惰者、其回也與。

【讀方】子曰く、之れに語りて惰らざる者は、其れ回か。

【字義】○語、道徳を教へ語る○惰、怠る。

【義解】孔子曰く、私が弟子達に道を語り聞かせるが其の中でその道を惰らず實踐躬行する者は恐らく顔回一人であらう。

子謂顔淵曰、惜乎、吾見其進也、未見其止也。

【讀方】子顔淵を謂つて曰く、惜かな吾れ其の進むを見るも、未だ其の止まるを見ざるなり。

【義解】孔子が顔回の早世を惜しんで且つ之を評して曰く、回の死は惜しむべきである。私は回の學問が日一日と進むのを見たがまだ惰つて停止するのを見なかつた。

子曰、苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫。

【讀方】子曰く、苗にして秀でざる者あるかな、秀でて實らざる者あるかな。

【字義】○秀、花咲く○實、みがなる。

【義解】孔子曰く、世には苗のまゝで花が開かないで終るものも少くはない。又折角花が咲いても實のならぬ者も稀にある。これらは誠に惜しむべきことで中途にして倒れ又は怠懈しなければ立派な果實を結んで聖賢の材となつたであらうに。

子曰、後世可畏、焉知來者之不如今也。四十五十而無聞焉、斯亦不足畏也已。

【讀方】子曰く、後世畏るべし、焉んぞ來者の今に如かざるを知らん。四十五十にして聞ゆること無きは、斯れ亦畏るるに足らざるなり。

【字義】○後世、我れから後に生れたもの、年若い人○來者、將來○今、現在。

【義解】孔子曰く、後進の士は畏るべきである。從つて將來これらの人が現在の吾等に及ばずといふことはない。必ず勉勵するならば春秋にも氣力にも富むのである

から、現在の人々よりも進歩することは疑ない筈である。しかし中途にして怠り四十五十になつても名聲が聞えないならば、それらの人は決して畏れるに足りない、平凡の徒である。

子曰、法語之言、能無從乎、改之爲貴。巽與之言、能無說乎、繹之爲貴。說而不繹從而不改、吾末如之何也已矣。

【讀方】子曰く、法語の言は、能く從ふこと無からんや、之を改むるを貴しとす。巽與の言は、能く說ぶこと無らんや、之を繹ぬるを貴しとす。說んで繹ねず、從つて改めざる、吾れ之れを如何ともする末きなり。

【字義】○法語之言、正面からの訓戒の言○巽與之言、婉曲に諷刺する言○說、悦ぶ○繹、尋ね探る。

【義解】人を訓誡するに二種ある。一は正面から堂々と正論を以て向ふ仕方で、之れには何人と雖も從はないわけにはゆかぬ。しかし從ふだけではいけない。自己の非を改めるのが貴い。一は遠廻しに婉曲に諫める方法で、之は其の意に逆ふとがないから何人も悦ばない者はない。しかし悦ぶだけではいけない。その諷刺の眞意を深く尋ね探らねばならぬ。人の諷刺を尋ねようともせず、直言に表面だけは從つて改めようとしない者は、如何とも度し難いものである。

子曰、主忠信、毋友不如己者、過則勿憚改。

【讀方】子曰く、忠信を主とし、己れに如かざる者を友とすること毋れ、過つては則ち改むるに憚かること勿れ。

【義解】而篇にある。

子曰、三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也。

【讀方】子曰く、三軍も帥を奪ふべきなり、匹夫も志を奪ふべからざるなり。

【字義】○帥、將帥○匹夫、賤しい人○三軍、兵三萬七千五百人を有する大軍。

【義解】三軍も之を襲つて將を奪ふことは敢て難かしいことではない。匹夫は下賤

な者だけれども一旦志したことは如何なる權威を以てしても奪ふことは出來ない。

子曰、衣敝縕袍、與衣狐貉者立而不恥者其由也與。不忮、不求、何用不臧、子路終身誦之。子曰是道也、何足以臧。

【讀方】子曰く敝れたる縕袍を衣て狐貉を衣たる者と立ちて恥ぢざる者は其れ由か忮はず、求らず、何を用て臧からん。子路終身之を誦せんとす。子曰く、是の道や何ぞ以て臧しとするに足らん。

【字義】○敝縕袍、破れた布子、縕は古綿、袍は綿を入れた着物○狐貉、狐や貉の皮○不忮不求、忮は害ふ、求は貪る○用、以て○臧、善い。

【義解】孔子曰く破れた古い着物をきて狐貉の皮をつけた立派な服裝の人の中へ立ち交つて少しも恥づる所ないのは由一人であらう。詩の衞風雄雉の篇に「人を忌み害せず又他を羨み貪るやうなことはない」とあるが由の如きは蓋し其の人であらうと。子路は之をきいて終身誦しようといつた。孔子は只その一言のみでは道の一部で全體で

ないから、之れに安んじてはならないと戒められた。

子曰、歲寒然後知松柏之後彫也。

【讀方】子曰く、歲寒うして然る後松柏の彫むに後るるを知るなり。

【字義】○後彫、彫は凋む、他の草木は凋むが松柏は凋まない。後に凋むの義ではない。

【義解】孔子曰く、春夏の候には萬の草木が青々と茂つてゐるが秋冷を催す頃からかけ漸く黄ばみ始めて嚴寒の候に到れば大抵の草木は凋落し終るのであるが松柏のみは依然として蒼色を呈し挺然として存してゐる。之は彼の平時に於ては君子も小人も別ちがないやうだが、一度事變にあへば小人は萎縮し轉落するが、獨り眞の君子のみは節義を守つて利害の外に超然としてゐると似てゐる。

子曰、知者不惑、仁者不憂、勇者不懼。

【讀方】子曰く知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず。

【義解】知者は物の道理に通じてゐるから事に當つて少しも惑ふことがない。仁者は天命を知り、悠々として利害を超越してゐるから決して憂へ心配しない。勇者は難を辭せず死を見る歸するが如くであるから少しも懼れることはない。

子曰、可與共學、未可與適道。可與適道、未可與立。可與立、未可與權。

【讀方】子曰く、與に共に學ぶべし、未だ與に道に適くべからず。與に道に適くべし、未だ與に立つべからず。與に立つべし、未だ與に權るべからず。

【字義】○適、往く、道に進むこと○立、志操堅固なこと○權、物の輕重をはかる。

【義解】學問を志ざすことは容易であるが、道に進み行くことは難かしい。道に進むことは出來ても志を堅固にし守る所の變らない者は少い。守る所は固くとも事に當り物の輕重を權つて自在に道に合する所置をなすことは難かしいことである。

唐棣之華、偏其反而、豈不爾思、室是遠而。子曰未之思也、夫何遠之有。

【讀方】唐棣の華、偏として其れ反れり、豈爾を思はざらんや、室是れ遠ければなりと。子曰く、未だ之を思はざるなり。夫れ何の遠きことか之れ有らん。

【字義】○唐棣、ニハウメといふ樹○偏其反而、（而は助語で意味なし）偏は翩、反はそりかへる、ひら〳〵とそりかへる。

【義解】唐棣の詩にニハウメの花が翩々と散る時となつた思へばあなたと別れる頃この花は盛りであつたが、今また花の時となつた。常にあなたを思つてゐるが家が遠い爲に志が達しないのであると歌つてゐる。孔子は此の詩を道を學ぶ方に借り用ひて曰く、道は日常のふみ行ふべきことで遠くにあるわけでない。道が遠いと考へるのは思はないからである。思へば道は直ちに至る何の遠いことがあらうかと教へられた。

鄉黨第十

此の篇すべて十七章。孔子の日常に於ける言行擧動を記したものである。

孔子於鄉黨、恂恂如也、似不能言者。其在宗廟朝廷、便便言、唯謹爾。

【讀方】孔子鄉黨に於て、恂々如たり、言ふ能はざる者に似たり。其の宗廟朝廷に在るや、便便として言ふ、唯だ謹しむのみ。

【字義】○鄉黨、前に出づ、鄉里の義○恂恂、恭謹朴實の貌○便便、明らかに辯ずる貌。

【義解】孔子の鄉里に於けるや恭謹にして謙遜言ふことの出來ない者のやうである。それは鄉里は父兄長者の居る所だから子弟の禮を執るのである。之れに反して宗廟や朝廷に在つては少しもさし控えることなく明白に辯ずる。しかし決して放言して禮を失ふやうなことはしない。

朝與下大夫言、侃侃如也。與上大夫言、闇闇如也。君在踧踖如也、與與如也。

【讀方】朝にして下大夫と言へば、侃侃如たり。上大夫と言へば闇闇如たり。君在せば踧踖如たり、與與如たり。

【字義】○朝、朝廷○下大夫、上大夫、上大夫は卿、大國は上大夫三人、下大夫五人の制此の時孔子は下大夫であつた○侃侃如、和らぎ樂しむ貌○闇闇如、中正の貌○踧踖如、敬の貌○與與如、安舒の貌。

【義解】孔子は朝廷に於て同僚たる下大夫と政を議するに和らぎ樂しんで言はれ、上官たる上大夫と物言へば闇々如として中正を旨として少しも諛る樣がない。又君王が朝廷に出御になれば踧踖として恭しく敬み、といつて窮窟でなく與々如として安らかに舒びやかである。

君召使擯、色勃如也、足躩如也。揖所與立、左右手、衣前後襜如也、趨進翼如也。賓退、必復命曰、賓不顧矣。

【讀方】君召して擯せしむれば、色勃如たり、足躩如たり。與に立つ所に揖するに手を左右にす、衣の前後襜如たり。趨り進むに翼如たり。賓退けば必ず復命して曰く賓顧みず。

【字義】○擯、客を接待する役目○勃如、顏色を變へる貌○躩如、進むことの出來

ぬやうな樣子○所與立、同役者○擡如、整ふ貌○翼如、手を拱いた形の端正なるを鳥の翼をはつたやうだと形容した貌○復命、天子からうけた命令の返事をすること。

【義解】　他國の君が來朝した時、君命によつて接待役を仰せつかつた場合に、顏色を正し足は敬意を表して輕々しくしない。同役に命を傳へる場合に左の人に揖すれば其の手を左にし、右の人に揖すれば手を右にして然も衣の前後は決して亂れない。賓客の前を趨り進むに鳥の翼を擴げた樣をする。賓客が退出すれば之を門外に送り出して我が君に申上げて曰く、賓客は後をふりかへることもなくて遠く去られましたとかく言上して君の心を安んずる。

入公門、鞠躬如也、如不容。立不中門、行不履閾。過位色勃如也、足躩如也。其言ふこと足らざる者に似たり。齊を攝げて堂に升るに鞠躬如たり、氣を屏めて息せざる者に似たり。出でて一等を降れば顏色を逞ち、怡怡如たり。階を沒して趨るに翼如たり。其の位に復れば、蹜蹜如たり。

似不足者。攝齊升堂、鞠躬如也、屏氣似不息者。出降一等、逞顏色、怡怡如也。沒階趨翼如也。復其位、蹜蹜如也。

【讀方】　公門に入るに鞠躬如たり、容れられざるが如し。立つに門に中せず、行くに閾を履まず。位を過ぐれば色勃如たり、足躩如たり、其言ふこと足らざる者に似たり。齊を攝げて堂に升るに鞠躬如たり、氣を屏めて息せざる者に似たり。出でて一等を降れば顏色を逞ち、怡怡如たり。階を沒して趨るに翼如たり。其の位に復れば、蹜蹜如たり。

【字義】　○公門、外門雉門路門の三を總稱していふ○鞠躬如、氣を曲げる貌○不中門、門の中央は君主の通路だからそこに立たない○過位、君の御座所の前を過ぎる○攝齊、齊はもすそ、攝はかかげる○屏氣、鼻息をこらす、屏は藏める○一等、一段階○逞、放つ○怡怡如、喜ばしい貌○沒階階段を下り盡す○復位、己れの立つべき位にかへる。

【義解】　孔子が朝廷に出仕するに、公門は高大であるが恭敬のあまり體を曲げて恰も門が小さくて通れないやうな樣子である。而して門の中央は君主の通路だからそこには立たず又閾を履むは禮を缺くから決して履むやうな事はない。君主の玉座の前を

通行するに、顔色は勃如と變じ、足は躩如と進み難い有樣をなし、敬意を表して無言である。衣の裳裾をかかげて政事の堂に升るに身を屈め、息をこらして進む。君主の前を退出して一段階を降れば顔色は始めて和らぎ、段階を下りつくせば疾行して己が座にかへり、しかも恭敬の心を失はないでゐる。

執圭、鞠躬如也、如不勝、上如揖、下如授、勃如戰色、足蹜蹜如有循、享禮有容色

私覿愉愉如也。

【讀方】圭を執るに鞠躬如たり、勝ざるが如し、上ぐれば揖するが如く、下ぐれば授くる如し。勃如として戰色あり、足蹜蹜として循ふことあるが如し。享禮には、容色あり、私に覿ゆるに愉愉如たり。

【字義】○圭、諸侯が始めて封を受けた時天子から授けられたもの、○如不勝、重くて持つにたえぬやうにする○戰色、おそれおののく貌○蹜蹜、小股に歩く○循、物によりしたがふ○享禮、享は獻、君の進物を隣國の君に獻する儀式○有容色、容貌顔

色ともに和ぐ○私覿、私人として隣國の君に拜謁する○愉愉如、愈々和らぐ貌。

【義解】孔子が君命をうけて他國へ使するに、その使者の證據として圭をとつて之を示す禮であるが、其の持ち方を謹しみ、重くないものであるが重さに勝へないやうな樣をなし、之を上げるに禮をするやうに之を下げるに人に物を授けるやうにする。顔色を正し恐れ謹んで足も小股に歩んで物により從ふやうな謹しみ深い歩み方をする君の進物を獻上するに容色を和げ、私禮を以て其の國の君に謁見するに愈容色を和げて禮を盡すのである。

君子不以紺緅飾。紅紫不以爲褻服。當暑袗絺綌、必表而出之。緇衣羔裘、素衣麑裘、黃衣狐裘。褻裘長、短右袂。必有寢衣、長一身有半。狐貉之厚以居、去喪無所不佩。非帷裳必殺之。羔裘玄冠不以弔。吉月必朝服而朝。

【讀方】君子は紺緅を以て飾りとせず。紅紫は以て褻の服となさず。暑に當つて袗絺綌の絺綌、必ず表にして之を出す。緇衣には羔裘、素衣には麑裘、黃衣には狐裘。褻の

袂は長く、右の袂を短くす。必ず寢衣あり、長一身有半。狐貉の厚き以て居る。喪を去つて佩びざる所なし。帷裳に非れば必ず之を殺す。羔裘玄冠以て吊せず。吉月には必ず朝服して朝す。

【字義】○紺緅、色の名紺は紺色、緅は桃色○飾、襟の縁○褻服、私宅に居る時の服○衾、ひとへ○絺綌、絺は細い葛布綌は太い葛布○緇、黒色○羔裘、黒い羊の皮の着物○素衣、白色の着物○麑裘、鹿の子の皮の着物○去、除く○佩、玉をおびる○帷裳、朝廷に出仕、又は祭時に用ふる着物○殺、裁ち切る○玄冠、黒色の冠○吉月、月の朔日。

【義解】君子の衣服は正色を用ひるから紺と桃色の二色を襟の縁としない。之は紺は齊服、緅は喪服であるからである。紅紫は間色で且つ婦人の用ひるものだから常服にしない。暑い時には衾の絺綌を上にきて皮膚を表はさない。黒衣には羊の黒い毛皮の着物白衣には鹿の子の毛皮、黄色には狐の皮を用ひる。常服は長く寛やかにし、右の袖を短くして仕事に便にする。寢巻は一身半の長さで足を覆ふ。裘は狐貉のやうな厚いものを用ひる。喪中の外は君子の徳に比してゐる玉は佩びないことはない。朝服祭服に用ひる帷裳の外は布の幅をそぐ。喪には白色を貴ぶから、黒い冠と黒い服では弔はない。月の朔日には朝服を着用して魯の君に見みえる。

【讀方】齊すれば必ず明衣あり、布を以てす。齊すれば必ず食を變じ、居れば必ず坐を遷す。

【字義】○齊、物いみ○明衣、齊服。

【義解】鬼神を祭るに齊する時には、身を潔めて明衣といふ齊服をつける。そしてその明衣は布で造つたものである。又齊の時は食物を變じて酒をのまず葷（にんにくの類）を食はず、居室に於ても、ふだん座してゐる所にすわらないで、別の清められた室に居られる。

食不厭精、膾不厭細、食饐而餲、魚餒而肉敗、不食、色惡不食、臭惡不食、失飪不食、不時不食、割不正不食、不得其醬不食。肉雖多不使勝食之氣、惟酒無量、不及亂。沽酒市脯、不食。不撤薑食、不多食。祭於公、不宿肉、祭肉不出三日、出三日、不食之矣。食不語、寢不言。雖疏食菜羹瓜、祭必齊如也。

【讀方】　食は精を厭はず、膾は細きを厭はず。食の饐して餲し、魚の餒して肉敗れたるは食せず、色の惡しきは食せず、臭の惡しきは食せず、飪を失へるは食せず、時なれざれば食せず、割正しからざれば食せず、其の醬を得ざれば食せず。肉多しと雖も、食の氣に勝たしめず、唯だ酒は量なし、亂に及ばず。沽へる酒市へる脯は食はず薑を撤てずして食す、多く食せず。公に祭りて肉を宿めず、祭肉は三日を出さず、三日を出づれば之を食せず。食して語らず、寢ねて言はず。蔬食菜羹瓜と雖も、祭るに必ず齊如たり。

【字義】　○食、飯○不厭、滿足する○饐、飯が熱や濕氣のために腐敗すること○餲、味のかはること○餒、魚肉の古くなつて腐敗すること○飪、程よい煮方○割、肉の切り目○醬、つゆ○沽、買ふ○市、買ふ○脯、ひもの○薑、しやうが○祭於公、公廟にまつる○蔬食、玄米の飯○菜羹、野菜ばかりの汁物○齊如、おごそかにつつしむ。

【義解】　飯米はよく精げたるもの、膾は肉を細く切つたのを以て滿足された。それは營養及消化によいからである。飯の腐敗して味のかはつたのや魚の肉のくさつたのは食はない。色の惡いのや臭の惡いのも食はない。煮方の度を失つたのを食はず又時節に合はぬものは食はない。以上は衞生を重んじ食はないのである。肉の切り目が正しくなければ食はない。それは禮に反くからである。肉がいかに多くとも飯米の分量よりも多くしない。酒は人によつて量を異にするから制限しないけれども決して亂暴に流れることはない。市場から買つた酒や脯は食はない。往々腐敗や不良なものがあるからである。薑は臭氣を去るものであるから食事には之をすてずして用ひ、多食は衞生に宜しくないからしない。君の廟の祭りを助けて贈られた胙

肉は一夜を越さずに家族にわけ與へる。吾家の祭肉は三日をとめないでわける。之は腐敗を恐れるからである。食時には言語を發せず、寢につく時も物をいはない。粗薄な飯野菜の羹瓜のやうなものでも、飲食を始めて作つた人を祭る、その祭る場合はおそれ敬しむのである。

席不正不坐。

【讀方】席正しからざれば坐せず。

【義解】敷物又は椅子が正しくなければ坐につかない。禮に反するためである。

鄉人飲酒、杖者出、斯出矣。鄉人儺、朝服而立於阼階。

【讀方】鄉人の飲酒に杖者出づれば、斯に出づ。鄉人の儺に朝服して阼階に立つ。

【義解】鄉黨の人々が相會して飲酒する時、老人が立つまでは席を立たないが、老

【字義】○杖人、六十以上の老人○儺、おにやらひ、疫病神をはらふ儀式○阼階、東の階主人の昇降する所。

人が出れば之れに從つて出る。之れ長者を敬するのである。又儺を行ふに當つては孔子は朝服にさかへて東階に立つて禮した。之は鬼神を敬するためである。

問人於他邦、再拜而送之。康子饋藥、拜而受之、曰丘未達、不敢嘗。

【讀方】人を他邦に問ふ、再拜して之を送る。康子藥を饋る、拜して之を受けて曰く丘未だ達せず、敢て嘗めず。

【字義】○問人、人の安否を尋ねさせる○送之、之は使者○康子、魯の大夫康季子○饋、贈遣する。

【義解】孔子が他國の知人の安否を尋ねさせる爲めに使者を見送るにその使者を見送るに再拜して送られた。或時大夫の康季子が孔子の病氣の時藥を贈られた。孔子は禮に從つて拜して受けられた。しかし未だ藥を用ふる程に達して居らないから、敢て嘗めませんといつてその厚意を謝した。

廐焚。子退朝曰。傷人乎、不問馬。

【讀方】廐焚く。子朝を退いて曰く、人を傷つけたるかと。馬を問はず。

【義解】孔子の廐が燒けた事があつた。孔子は朝廷から歸つて問うて曰く、人を傷つけはせぬかと。そして馬のことは問はれなかつた。蓋し馬の安否を問ふのが普通であるが、人は馬よりも大切だから第一に人の安否を尋ねたのである。

君賜食、必正席先嘗之。君賜腥、必熟而薦之。君賜生、必畜之。侍食於君、君祭先飯。疾、君視之、東首、加朝服拖紳。君命召、不俟駕行矣。

【讀方】君食を賜へば、必ず席を正しくして先づ之を嘗む。君腥を賜へば、必ず熟して之を薦む。君生を賜へば、必ず之を畜ふ。君に侍食するに、君祭れば先づ飯す。疾みて君之を視れば、東首して朝服を加へて紳を拖く。君命じて召せば、駕を俟たずして行く。

【字義】○腥、煮ない生肉○熟而薦、よく煮て家廟に供へる○侍食、陪食○視、見舞○拖紳、大帶を引き渡す○不俟駕、馬車の仕度をまたない。

【義解】君から調理した食物を賜はれば、席を正して君のお前に於けるが如くして之を少しく味はひ、他は親族に頒つ。又君から生の肉を賜はれば之をよく煮燒きして祖先の靈前に供へられる。君から生きた牛羊などを賜はれば之を畜つておいて祭時の犧牲にあてられた。君の陪食を仰せつかつた場合には君に先つて箸を取られた。之は毒味の事に當るのである。自己の病氣の時君が見舞においでになれば、東向きに横はり、朝服を寢衣の上に加へてその上に紳をひく。蓋し病中と雖も不敬に當らぬやうつしむのである。又君命によつて召さるれば馬車の用意をまたずに急いで行かれる。之は君に對する禮をつくされた有樣である。

入太廟每事問。

八佾篇にある。

朋友死無所歸。曰、於我殯。朋友之饋、雖馬車、非祭肉不拜。

【讀方】朋友死して歸する所無し。曰く、我に於て殯せよ。朋友之饋は馬車と雖

も、祭肉にあらざれは拜せず。

【字義】○殯、カリモガリ、死者を棺に納めて葬の日まで座敷に安置する○饋、贈物。

【義解】朋友が死んで親戚なく遺骸を置くべき所がなければ、孔子は我が家に殯せよといはれた。朋友からの饋は馬車のやうな重大なものでも拜しない。唯祭肉を頒たれた時のみは祖先を敬するために拜して之を受けられた。蓋し朋友は艱難の場合には相救ふのが當然であるからである。

寢不尸、居不容。見齊衰者、雖狎必變。見冕者與瞽者、雖褻必以貌。凶服者式之。式負版者。有盛饌必變色而作。迅雷風烈必變。

【讀方】寢ぬるに尸せず、居るに容づくらず。齊衰の者を見ては、狎れたりと雖も必ず變ず。冕者と瞽者とを見ては、褻れたりと雖も、必ず貌を以てす。凶服の者には之に式す。負版者に式す。盛饌あれば必ず色を變じて作つ。迅雷風烈には必ず變ず。

【字義】○尸、シカバネ死人のやうな態をすること○容、容儀をつくること○齊衰、喪服をつけた者○狎褻、共になれること○以貌、正しい容貌を以て接する○凶服者、葬式の服をきた人○式、車の前の横木に手をかけてうつむく○負版者、版は國の地圖戸籍、それを負ふた者○盛饌、立派な御馳走○作、起つ。

【義解】孔子は睡眠中も死人のやうな態をしてだらしなくしない。又家に居る時は和らいで敢て容儀をつくりしかつめらしくしない。喪服を着た人を見れば平常狎れ近しい人でも容貌を變じて哀れみの情を表はし、冠をかぶつた人即ち爵位ある人と盲目の人とを見れば、褻れ近しくしてゐても貴ぶべき人、それ〳〵に敬意を表した。車に乘つて他出された時に葬式の服を着た人にあへば、身を屈し横木によつて禮し、又邦の地圖戸籍を背に負ふ者にあへば同じく禮する。之一に喪ある者を哀しみ、一には王者を敬するの意である。人に招かれて立派な御馳走を出された時は分に過ぎるといふやうに容貌を變じて厚意を謝する。又強雷烈風にあへば顏色を變じておそれ謹しむ。

之は天の怒りを敬するのである。

升車、必正立執綏、車中不內顧、不疾言、不親指。

【讀方】車に升るに必ず正しく、立つて綏を執る、車中に內を顧みず、疾く言はず親しく指さず。

【字義】○綏、車上から垂れ升降の際に引く繩○不疾言、早口に物をいはない○不親指、自身に物を指さない。

【義解】孔子が車に升られるに正しく立つて引き繩を引いて上り、車中に於ては左右を顧みることなく、早口に物をいはず、親ら指すやうな輕率なことはしない。

【字義】○色斯擧矣、翔而後集。曰山梁雌雉、時哉、時哉。子路共之。三嗅而作。

【讀方】色みて斯に擧り、翔りて後に集る。曰く、山梁の雌雉、時なる哉、時なる哉。子路之を共す。三たび嗅ぎて作つ。

【字義】○色斯擧、人の顏色をみて己れを執へんとする樣子が見えれば飛び上る○集、とまる○梁、橋○共之、雉を食膳に供した。

【義解】鳥は用心深いもので、人の己れを害せんとする樣子あれば直ちに飛び揚り空中を翔りつつ患へなければ下りて來て止まる。孔子が或る時山中の橋の邊を過ぎて一羽の雌雉を見て、歎息して曰く、時なるかな、時なるかな、能く幾を見て飛び幾を見て止まる、それは恰も君子が時によつて進退出處その宜しきを得るに似てゐると。然るに之れに隨行してゐた子路は孔子の意を誤解して、時なるかなとは雉を食ふによい時節なるかなと賞美されたのだと思つて、雉の料理を食膳に供した。孔子は之を食ふに忍びなかつた。しかし又子路の志を無にするを遺憾として三度嗅いで座を立たれた。君子の仁慈その鳴き且つ啄むを見ては敢てそれを食するに忍びなかつたのである。

先進第十一

此の篇すべて二十五章。門弟子との問答を記す。諸弟子の人物批評が多い。

子曰、先進於禮樂野人也、後進於禮樂君子也、如用之、則吾從先進。

○【讀方】子曰く、先進の禮樂に於けるや野人なり、後進の禮樂に於けるや君子なり。如し之を用ひば、則ち吾は先進に從はん。

【字義】○野人、田舍人○君子、朝廷の士大夫。

【義解】孔子曰く、昔の人の禮樂を執り行ふや質朴にして文飾が足りないから恰も田舍の人のやうである。今の人の禮樂を行ふや、外觀頗る美しくて朝廷の士大夫の如くである。しかし中心の誠意がかけてゐる。私が若しも朝廷に立つて禮樂を用ひるならば、文飾は足りないが質の勝つてゐる先進の禮樂をとりたいと思ふ。

子曰、從我陳蔡者、皆不及門也。德行、顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語宰我、子貢、政事、冉有、季路、文學、子游、子夏。

【讀方】子曰く、我に陳蔡に從ひし者は皆門に及ばず。德行には顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語には宰我、子貢、政事には冉有、季路、文學には子游、子夏。

欠

人を知るといふ意義である」と孔子の言に例證していつた。

子貢問友。子曰忠告而善道之、不可則止、無自辱焉。

【讀方】子貢友を問ふ。子曰く、忠告して善く之を道びき、不可なれば則ち止む、自ら辱しめらるることなかれ。

【字義】○善道、よく導びく。

【義解】子貢が友に交はる道を尋ねると、孔子の曰く、「惡を戒め善を進めるのは朋友の道である、故に心の誠をつくして告げあひ、以て善に導びき入れさせる。しかしどうしてもきかなければ交を絶つがよい。餘りにくどく忠告すればかへつて恥辱をうけるやうになるであらう。

曾子曰、君子以文會友、以友輔仁。

【讀方】曾子曰く、君子は文を以て會し、友を以て仁を輔く。

【字義】○文、詩六藝の文○輔仁、己れの仁德を輔成すること。

【義解】曾子曰く「君子の學を修むるに、六藝の文を講究する爲めに同志の友を會して互に論究し、一方には知識の交換を行ふと共に朋友の善を見習つて己が仁德を成就するの輔けとする」と。

子路第十三

此の篇すべて三十章。

子路問政。子曰、先之勞之。請益。曰、無倦。

【讀方】子路政を問ふ。子曰く、之に先だち之に勞せよ。益さんことを請ふ。曰く、倦むこと無かれ。

【字義】○之、二字とも人民を指す○益、增す。

【義解】子路が政事の道を問うたので、孔子は「民に先んじて身を正しくして衆を率ゐ、民のために身を以て勤勞すれば民亦行を正し上のために力を惜しまなくなる」といはれたが、子路は物足らぬ感がしたと見えて猶ほ外に增し加ふべきことはと尋ねた。孔子唯一言倦むことなくたすら民の爲めにはかれ」と仰せられた。

仲弓爲季氏宰、問政。子曰、先有司、赦小過、擧賢才。曰焉知賢才而擧之。曰、擧爾所知、爾所不知、人其舍諸。

【讀方】仲弓季氏の宰となり、政を問ふ。子曰く、有司を先にし、小過を赦し、賢才を擧げよ。曰く焉くにか賢才を知りて之を擧げんや。曰く、爾が知る所を擧げよ、爾の知らざる所は、人其れ諸を舍てんや。

【字義】○先有司、役人を第一に選べ○赦小過、小過失は之をとがめない○舍諸、之を棄ておかない。

【義解】仲弓が季氏の執事となつた時、政を孔子に問うた。孔子曰く「先づ有司を選んで適任者をして各其の職掌に當らしめ、小過失は之を敢て各めず、賢者才を拔擢登用する、この三項である」と。仲弓更に曰く「如何にして賢才を拔擢しませうか」孔

子曰く「それは爾の知つてゐる賢才をあげたらよい。爾の目の届かない所の賢才は必ず他人が推擧するであらう。」

子路曰、衞君待子而爲政、子將奚先。子曰、必也正名乎。子路曰、有是哉子之迂也、奚其正。子曰、野哉由也、君子於其所不知、蓋闕如也、名不正、則言不順、言不順、則事不成、事不成、則禮樂不興、禮樂不興、則刑罰不中、刑罰不中、則民無所措手足。故君子名之必可言也、言之必可行也、君子於其言、無所苟而已矣。

【讀方】子路曰く、衞の君子を待ちて政を爲さば、子將に奚をか先とせんとする。子曰く、必ずや名を正さんか。子路曰く、是れあるかな、子の迂なる、奚ぞ其れ正さん。子曰く、野なるかな由や、君子は其の知らざる所に於て蓋し闕如す、名正しからざれば則ち言順はず、言順はざれば則ち事成らず、事成らざれば則ち禮樂興らず、禮樂興らざれば則ち刑罰中らず、刑罰中らざれば則ち民手足を措く所なし、故に君子は之に名れば必ず言ふべきなり、之を言へば必ず行ふべきなり、君子其の言に於て苟もする所なきのみ。

【字義】○衞君、出公輒をいふ、輒無道にして父蒯聵と戰ふ○正名、名分を正すこと○有是哉子之迂也、夫子の事情に遠く迂遠だといふ噂さは尤もだ○野、鄙俗○闕如、さしおく、言に出さぬこと○無所苟、かりそめにはしない。

【義解】孔子が楚から衞に返られた時、子路が問うて曰く「若し衞君輒が夫子の言を用ひて政をしようとなされたら、何を第一になさいますか」と。孔子曰く、「先づ君臣父子の名分を正さう」子路之をきいて「世間の人が夫子は迂遠にして事情に切でないといふが誠に其の通りである」といつたので、孔子はその失言を咎めて曰く「由や、おまへは禮儀をわきまへぬ野卑な男であるよ、君子は自分の知らないことは謹しんでいはぬものだが、おまへは名分の必要なことも知らずに輕々しく發言する妄言者である。抑も名を正さなければ、言ふことが義に合はない。言ふことが義に合はねば政事は成就しない。政事が成就しなければ治安の本たる禮樂の道が盛にならない。禮

樂が盛にならねば、刑罰の適用もその當を得ない。刑罰は禮樂に從つて民を規正するものであるから、若しも刑罰がよく行はれなければ人民は身をおく所がない。故に名を正すことが第一の要務である。名分を正せば言ふことが不義に陷らず言義に當れば必ず行はれる。故に君子は義に合はなければ輕々しく發言しないのである」と。

樊遲請學稼。子曰、吾不如老農。請學爲圃。曰、吾不如老圃。樊遲出。子曰、小人哉、樊須也、上好禮則民莫敢不敬、上好義、則民莫敢不服、上好信、則民莫敢不用情夫如是、則四方之民、襁負其子而至矣、焉用稼。

【讀方】樊遲稼を學ばんことを請ふ。子曰く、吾は老農に如かず。圃を爲るを學ばんことを請ふ。曰く、吾れ老圃に如かず。樊遲出づ。子曰く、小人なるかな、樊須や。上禮を好めば則ち民敢て敬せざることなし、上義を好めば、則ち民敢て服せざることなし、上信を好めば、則ち民敢て情を用ひざることなし、夫れ是くの如くなれば、則ち四方の民、其子を襁負して至る、焉んぞ稼を用ひん。

【字義】○稼、五穀を作ること○圃、野菜を作ること○小人、細民○樊須、須は樊遲の名○情、誠實○襁負、襁は小兒を負ふもの廣さ八寸長さ一丈二尺の布片、子を負ふこと。

【義解】樊遲が五穀を作ることを尋ねた所が、孔子は私は經驗の深い老農に及ばない」と答へられた。更に野菜を作ることを尋ねたから「私は老圃の如き經驗ある者には及ばない」と答へられた。樊遲が退出した後、孔子は門人にいつて曰く「樊遲は氣の小さい細民と同じやうな男だ。君子の道は稼圃の小事ではない。禮、義、信がその主たる者である。上たる者が禮を好めば民敬を盡し、上義を好めば民心服し、上信義を好めば民は誠實に事へるものである。かく禮義信を上たる者が好んでゐるならば、四方の人民は子供を背負うてその國に集まるであらう。何で稼圃の小事など學ぶ必要があらう。

子曰、誦詩三百、授之以政不達、使於四方、不能專對、雖多亦奚以爲。

【讀方】子曰く、詩三百を誦し、之に授くるに政を以てして達せず、四方に使して

專對すること能はずんば、多しと雖も亦奚ぞ以て爲ん。

【字義】○誦、諳誦○不達、政事に通達しない○不能專對、獨りで應接することが出來ない。

【義解】孔子曰く、詩は人情の機微、政事の得失を寓するものである。然るに三百の詩篇を諳誦してゐながら、政事に與つてそれに通達することも出來ず、君命を帶び四方に使して應對明辨以て使命を全うすることが出來なければ、いかに多くを學んでも何にもならないではないか。

子曰、其身正、不令而行、其身不正、雖令不從。

【讀方】子曰く、其身正しければ、令せずして行はれ、其身正しからざれば、令すと雖も從はず。

【義解】孔子曰く、上たる者は其の身の行が正しければ、敎令を發しなくても政事がよく行はれ、其の行が正しくなければ如何に敎令を發しても、政事は行はれず人民は歸服することない。

子曰、魯衞之政、兄弟也。

【讀方】子曰く、魯衞の政は、兄弟なり。

【義解】孔子曰く、魯は周公旦の後、衞は康叔封の後であるから、政事の仕方も似てゐて兄弟のやうな國である。しかし現今兩國共に衰へてしまつたのは遺憾である。けれどももと聖賢の治めた國であるから、兩國共通に至らしめるは易いとてある。

子謂衞公子荊、善居室、始有、曰苟合矣、少有、曰苟完矣、富有曰、苟美矣。

【讀方】子衞の公子荊を謂り、善く室に居れり、始めて有るに曰く、苟に合れり、少く有るに曰く、苟に完し、富に有るに曰く、苟に美なりと。

【字義】○衞公子荊、衞侯の庶子、名は荊、賢大夫○善居室、よく家政を修めた○苟合、誠に聚つた、合は聚○富有、富は盛、澤山に家財がふえること。

【義解】孔子が衞の公子荊を評して曰く「誠に家政を修めることが巧みである。始

め家財が少しばかり出來た時に誠によく聚まつたといひ、其後稍〻家財が出來てきた時に誠に完備したといひ、盛に充足するやうになつてから誠に精巧を極めたといつて喜んだ。之は誠に分に應じ、足るを知る所の人である」といつた。

子適衞、冉有僕。子曰、庶矣哉。冉有曰、既庶矣、又何加焉。曰、富之。曰、既富矣、又何加焉。曰、敎之。

○【讀方】子衞に適く、冉有僕たり。子曰く、庶なるかな。冉有曰く、既に庶なり、又何をか加へん。曰く之を富さん。曰く既に富あり、又何をか加へん。曰く之を敎へん。

【字義】○適、往く○僕、車を御すること○庶、人民が冉多いこと。

【義解】孔子が衞に往かれた時、冉有が馬車の御者となつてゐた。孔子が土地の繁華なのを見て、「誠に人口の多いことよ」といはれた。冉有はそれをきいて「このやうに人口が多いならば此の上に何か增すべきものがありますか」と問うた。孔子は「之を富まして衣食に十分ならしめたい」といつた。冉有更に「富んだならばその次は」と問ふと、「富んだ後には之に先生の道を敎へて人たる道を全うせしめたい」といつた。

子曰、苟有用我者、期月而已可也、三年有成。

【讀方】子曰く、苟に我を用ふる者あらば、期月のみにして可ならん、三年にして成ることあらん。

【字義】○苟、誠に○期月、十二ヶ月○可、ほぼ宜しい○成、成功する。

【義解】孔子曰く、「誠に私を登用して政事を委すならば、一ヶ年にして紀綱を振肅してほゞ政事の本を立てることが出來よう。そして三年後には治績全く成るであらうに」とその自信を示された。

子曰、善人爲邦百年、亦可以勝殘去殺矣、誠哉是言也。

【讀方】子曰く、善人邦を爲むること百年ならば、亦以て殘に勝ち殺を去るべしと

誠なるかな是の言や。

【字義】○勝殘、殘暴に勝つ○去殺、殺戮の刑を去る。

【義解】孔子曰く、「古語に善人が百年も續いて邦を治むれば、殘暴の風俗を善化し、刑戮を用ひるやうな事も除去して風俗が敦厚になるだらうといはれたが、誠にその通りである」と。

子曰、如有王者、必世而後仁。

【讀方】子曰く、如し王者あらば、必ず世にして後に仁ならん。

【字義】○王者、聖人にして天命をうけて王たる人○世、一世、三十年をいふ○仁仁政が洽ねく行はれるであらう。

【義解】孔子曰く、「若し聖人が出て天下を治めるならば、必ず三十年の後には德化四海に洽く、化育が成就するであらう。

子曰、苟正其身矣、於從政乎何有、不能正其身、如正人何。

【讀方】子曰く、苟に其の身を正しくせば、政に從ふに於て何かあらん、其の身を正すこと能はずんば、如何せんや。

【字義】○從政、政事に與る、ここは君主ばかりでなく大夫の如きも含んでゐる。

【義解】孔子曰く、政事の要は己が身を正して人を正すのであるから、自己を正すことが出來なければ、到底人を正しくすることは不可能である。

冉有退朝、子曰、何晏也。對曰、有政。子曰、其事也、如有政、雖不吾以、吾其與聞之。

【讀方】冉有朝より退く。子曰く、何ぞ晏きや。曰く、政あり。子曰く、其れ事ならん、如し政あらば吾れを以ずと雖も、吾れ其れ之れを與りきかん。

【字義】○退朝、季氏の私朝から歸る○晏、遲い○事、季氏の家事であらう○以、用ひる。

【義解】　冉有が季氏の役所から退出してきた時、孔子が「何故そんなに遅いのか」と尋ねられると、冉有は「今日は國の政事上のことがありまして」と對へられたので孔子は「其れは季氏の家の相談であらう。若し魯の國の政事であるならば、私は今仕をやめてゐるが大夫の格を以て遇せられてゐる上は、その國政に與り聞かないといふことはない。」といつて、季氏の國政を其の私朝に私議するを諷した。

定公問一言而可以興邦、有諸。孔子對曰、言不可以若是其幾也。人之言曰、爲君難、爲臣不易。如知爲君之難也、不幾乎一言而興邦乎。曰一言而喪邦、有諸。孔子對曰、言不可以若是其幾也。人之言曰、予無樂乎爲君、唯其言而莫予違也。如其善而莫之違也、不亦善乎、如不善而莫之違也、不幾乎一言而喪邦乎。

【讀方】　定公問ふ。一言にして以て邦を興すべきこと諸れ有りや。孔子對へて曰く言是くの如く其れ幾すべからず。人の言に曰く、君たること難し、臣たること易からずと。如し君たるの難きを知らば、一言にして邦を興す幾からずや。曰く、一言にして邦を喪なふこと諸れ有りや。孔子對へて曰く、言以て是くの如く其れ幾すべからず人の言に曰く、予君たるを樂しむことなし唯其の言にして予に違ふことなしと。如し其れ善にして之に違ふこと莫んば、一言にして邦を喪ぼすに幾からずや、亦善からずや、如し不善にして之に違ふこと莫んば、一言にして邦を喪ぼすに幾からずや。

【字義】　○一言、一句の言○幾、近い○予、人君自らをさす。

【義解】　魯の定公が「一言にして國を興すべき言葉があるかと尋ねた。孔子は「言葉といふものは一言にして國を興す程のものではございませんが、人のよく言ふ言葉に君たることも難かしければ臣たることも容易ではないと申します。人君となる人は衆民を愛撫し、自ら善を以て衆を率ゐなければならぬもので並大抵の苦心ではありませんん。故に君たることの難いことを常に思つてゐるならば、この一言にして邦を興すに近いでございませう」と申上げた。定公は更に「一言にして國を喪ぼす言葉があるか」と尋ねられた。「孔子は一言にして國の敗亡する言葉とてはございませんが、それに

近い言葉はあります。よく世人のいふ言葉に、私は（人君）君たることを格別悦び樂しいとは思はないが、唯一つ私の言葉に違背する者がないのが嬉しいといひますが、若しその言葉が善であるならば結構ですが、不善な言葉であるにも拘はらず君の威勢に恐れて違ふ者がないといふに至つては、只この「其の言予れに違ふなし」といふ一言を以て邦を喪ぼすに近いかと存じます」と申上げた。

【讀方】葉公問政。子曰、近者說、遠者來。

【字義】葉公政を問ふ。子曰く、近き者說び、遠き者來る。

【義解】葉公、楚の大夫○說、悦ぶ。

楚の大夫葉公が政を尋ねたので、孔子は「仁政を布き恩愛を施せば、近き者は悦服し、遠き者も其の政を慕つて集り來るであらう。それが政事の道である」といはれた。

子夏爲莒父宰問政。子曰、無欲速、無見小利、欲速則不達、見小利則大事不成。

【讀方】子夏莒父の宰となつて政を問ふ。子曰く、速かなることを欲する無かれ、小利を見ること無かれ、速やかならんと欲すれば則ち達せず、小利を見ては則ち大事成らず。

【字義】○莒父、魯の邑の名。

【義解】子夏が莒父の邑宰となつて政を尋ねたので、孔子は「政をなすに速成を欲するな、又小利を見るな。政の極致は民を富ましめ、之に道を教へ、義に就かしめることであるから、急速を欲しては出來るものではない。又政事は目前の小利を見て遠大の業を忘れる時は、小成功はなし得ても政事の大事を失ふことになる」と教へられた。

○葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊、而子證之。孔子曰、吾黨之直者異於是、父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣。

【讀方】葉公孔子に語つて曰く、吾が黨に直躬なる者あり、其の父羊を攘みて、而して子之を證す。孔子曰く、吾黨の直き者は是に異る、父は子の爲めに隱くし、子は

父の爲めに隱くす、直きこと其中にあり。

【字義】　○黨、鄕黨○直躬、躬を直くすると讀む人もあるが、躬といふ正直者と見て、人名とする方をとる○攘、竊みとる。

【義解】　葉公が孔子に語つて曰く、「私の村に正直者の直躬といふ男があるが、嘗てその父が他家の羊の迷ひ來つたのを竊み取つた時に、直躬は我が父が攘んだと證明した。誠に正な直男ではないか」と。孔子曰く「私の村の正直者はそれと大分趣きが違ふ。直とは理に順ひ人情に適ふ[illegible]であある。父の罪を證するは一見直の如くであるが、父子相愛する天理人情にそむく。父は子のために罪をかくし、子は父のために庇ふといふことが寧ろ自然に近く、正直といふことも其の中から來なければ虛である」とおつしやつた。

樊遲問仁。子曰、居處恭、執事敬、與人忠、雖之夷狄不可棄也。

【讀方】　樊遲仁を問ふ。子曰く、居處には恭、事を執りては敬、人と忠、夷狄に之くと雖も、棄つべからざるなり。

【字義】　○居處、平日獨居の時○之、往く。

【義解】　樊遲が仁を問うた。孔子は「平常無事の時も恭しくし事を執り行ふ場合には心を專一にして敬しみ、人と交はる時は、眞心をつくしてかはらない、これが仁である。そしてこの仁德を持てば夷狄のやうな野蠻な國へいつても棄てられるやうな事はない」と答へられた。

子貢問曰、何如斯可謂之士矣。子曰、行己有恥、使於四方、不辱君命、可謂士矣。曰、敢問其次。曰、宗族稱孝焉、鄕黨稱弟焉。曰敢問其次。曰、言必信、行必果、硜硜然小人哉、抑亦可以爲次矣。曰、今之從政者何如。子曰、噫、斗筲之人、何足算也。

【讀方】　子貢問うて曰く、何如ぞ斯に之を士と謂ふべき。子曰く、己を行ふに恥あり、四方に使して君命を辱かしめず、士と謂ふべし。曰く敢て其の次を問ふ。曰く、

宗族孝を稱し、鄉黨弟を稱す。曰く敢て其の次を問ふ。曰く言ふこと必ず信あり、行ひ必ず果す、硜硜然として小人なるかな、抑亦た以て次と爲すべし。曰く、今の政に從ふ者は何如。子曰、噫斗筲の人、何ぞ算ふるに足らん。

【字義】　○行己有恥、身の恥になることを行はない○行必果、必ず行ひとげる○硜然、小石の堅いやうな貌○噫、ああ○斗筲之人、斗は一斗桝、筲は竹器で一斗二升を容る、斗桝で量るやうな小さい人物といふ意○算、數へる。

【義解】　子貢が如何なる人を士といふべきかと尋ねた。孔子は「己が身の恥となるやうな非義な行をしないで、君命によつて諸國へ使した場合には立派に使命を果すことの出來る人物を士といふ」と答へた。子貢は「只今のは第一等の士といふべき人でせうが、次に位すべき士とは如何なる人物でせうか」と尋ねると、孔子は「親族は孝といつて賞め鄉黨の人々は、悌といつて賞める程の人物である」と。更にその次はの間に「言ふことは信實で、行ふ所は必ずなし遂げるけれども時に應じて自在に行動し得ない、小石のやうな堅くて狹量な人物で、不十分ながら次に位すべきである」と答へられた。そこで子貢は「今の政事に與つてゐる鄉大夫の如き人々は」と尋ねると、孔子は「まるで斗桝で量るやうな小さな人物ばかりでお話しにならない」と嘆ぜられた。

子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎、狂者進取、狷者有所不爲也。

【讀方】　子曰く、中行を得て之に與せずんば、必ずや狂狷か、狂者は進みて取り、狷者は爲さざる所あり。

【字義】　○中行、中道を得た人○狂者、志高く行の及ばぬ人○狷者、廉潔にして守りにたえる人。

【義解】　孔子曰く、過不及なき中道を得た人と共にしたいがそれが出來なければ、せめて狂者と狷者とに與したい。狂者は志徒らに大きくて中道に過ぎてゐるが進取の氣に滿ちてゐるし、狷者は知は及ばないが志操が堅固で不善を決してしないものであ

る。故にせめて此の二者と共に事をしたいものである。

子曰、南人有言、曰、人而無恒、不可以作巫醫、善夫。不恒其德、或承之羞。子曰不占而已矣。

【讀方】子曰く、南人言へることあり、曰く、人にして恒なくんば、以て巫醫となるべからずと、善いかな。其の德を恒にせざれば、或は之が羞を承んと。子曰く、占はざるのみ。

【字義】○南人、南方人○無恒、恒久不變の心のないこと○巫醫、巫は神に祈る人、醫は醫者○不恒其德或承之羞、易の恒の卦にある。羞は恥。行が變化して恒なければ恥辱をうけるだらう○不占而已、占ふまでもない。

【義解】孔子曰く「南方人の言に、恒心なければ人が之を信じない。故に巫醫となつて神に事へ又は人命を醫することが出來ないといふが、誠にその通りで巫醫さへも然りであれば國士たる者は猶更恒心が必要である。彼の易に恒の德がなければ恥辱をうけるといふ意味の言があるが、恒心なきものの凶をうけることは占ふまでもない必然なことである。」

子曰、君子和而不同、小人同而不和。

【讀方】子曰く、君子は和して同せず、小人は同して和せず。

【字義】○和、やわらぎ親しむ○同、附和雷同。

【義解】孔子曰く、君子は相親しみて人と和するけれども、義によつて行動らやたらに人に雷同はしない。これに反して小人は利に趨り易い故に互に利の附和雷同はするが、さて義によつて相和親することは出來ないのである。

子貢問曰、鄉人皆好之何如。子曰未可也。不如鄉人之善者好之、其不善者惡之。

【讀方】子貢問うて曰く、鄉人皆之を好せば何如。子曰く未だ可ならざるなり。鄉人皆之を惡まば之を何如。子曰く未だ可ならざるなり。鄉人の善者之を好し、其の不

善者之を惡むに如かず。

【義解】子貢問うて曰く「鄕人が皆その人を賞讃すればその人物は賢といふべきか」と。孔子曰く「人は各好惡があるから衆人の評と雖もあてにはならぬ」子貢が「然らば鄕人が之を惡んだならば惡人といつてよいか」との問に「やはり一概にいふことは出來ぬ。それよりか鄕中の善人が之をほめ、不善人が之を惡む所の者を賢人とする方が公平に近い」といはれた。

子曰、君子易事而難說也、說之不以道、不說也、及其使人也、器之。小人難事而易說也、說之雖不以道說也、及其使人也、求備焉。

【讀方】子曰く、君子には事へ易く說ばせ難し、之を說ばすに道を以てせざれば說ばざるなり、其の人を使ふに及んでや之を器にす。小人には事へ難くして說ばせ易し之を說ばすに道を以てせざるも說ぶなり、其の人を使ふに及んで備はるを求む。

【字義】○說、悅ぶ○器之、器は各〻用を異にする如く、材力に適した所に用ひること。

【義解】孔子曰く「君子には事へ易くて悅ばせにくい。何故となれば君子は諂諛を斥け聲色貨利を喜ばないから、義に合ふ外のことでは說ばない。而も人を使ふには其の長所によつて任用し、決して全才を人に求めない。小人は是に反して事へ難いが悅ばせるには易い。何となれば小人は聲色貨利を好むから道を以てしなくても否かへつて利を以てし、佞諛を以てすれば悅ばせることは易い。而も人を使ふや刻薄にして全能の完備することを人に求める。故に仕へ難いのである。」と。

子曰、君子泰而不驕、小人驕而不泰。

【讀方】子曰く君子は泰かにして驕らず、小人は驕りて泰かならず。

【字義】○泰、ゆたか、安舒、○驕、たかぶる、驕肆。

【義解】君子は心中に畏れることがないから安らかにゆつたりとしてゐる。しかし驕肆の風や傲慢の樣子はなく謙遜にして人を容れる。小人は心中畏れ多く且つ外形を

つくろふに腐心するから、驕りたかぶる風をなし、しかも心中常に苦悶が多いから不安の狀態である。

子曰、剛毅木訥近仁。

【讀方】子曰く、剛毅木訥は仁に近し。

【字義】○剛、堅強にしてたゆまない○毅、強忍○木、質樸○訥、言葉の下手なこと。

【義解】孔子曰く「剛毅にして物に曳れず撓まないで、質樸にして外飾なく、言葉の巧みでない者即ち巧言令色の反對ともいふべき人は、仁者に近いものである。」

子路問曰、何如斯可謂之士矣。子曰、切切偲偲怡怡如也、可謂士矣、朋友切切偲偲、兄弟怡怡。

【讀方】子路問うて曰く、何如ぞ斯に士と謂ふべき。子曰く切切偲偲怡怡如たり、士と謂ふべし。朋友には切切偲偲、兄弟には怡怡。

【字義】○切切偲偲、切々は懇到、偲偲は勵み合ふさま○怡怡、打ちとけた貌。

【義解】子路が何如なる德を持つた人が士といふべきかと尋ねると、孔子の曰く「切切偲偲怡怡の三件である。而して朋友に對しては切切と懇ろに、偲偲として勉勵しあひ、兄弟には和氣藹然として睦み合ふことである」と。

子曰、善人教民七年、亦可以即戎矣。

【讀方】子曰く、善人民を教ふること七年、亦た以て戎に即くべし。

【字義】○即戎、戎は戰爭、即は就く。

【義解】性質の善良なる人の民を教へるや、聖人程に行かなくとも、孝弟忠信の道を教へ、農耕講武なさしめるによつて七年もたてば之を戰に用ひて、生死の間につかせることが出來る。

子曰、以不教民戰、是謂棄之。

【讀方】子曰く、教へざる民を以て戰はしむるは、是れ之を棄つると謂ふ。

【義解】孔子曰く「平日民に敎ふるに孝弟忠信の道や、射撃進退の法を以てしないでゐて、一旦事ある時にのみ之を戰場にかり出すのは、徒らに民を戰場に棄てに行くやうなものである」と。

憲問第十四

此の篇すべて四十四章。

憲問恥。子曰、邦有道穀、邦無道穀、恥也。

【讀方】憲恥を問ふ。子曰く、邦道あれば穀し、邦道なく穀するは恥なり。

【字義】○憲、孔子の門人原思の字○穀、食祿をはむ。

【義解】原憲が士たる者の最も恥づべきことは何ですかと尋ねた。孔子曰く邦に有徳の君主があつて天下がよく治まつて、何もなすことなくして食祿を戴くことと、邦に無道君主があつて天下が亂れた時に、之を諫めるやうな事もせずして利のために祿を食むのとは、共に君子の恥とすべきことである。

克伐怨欲不行焉可以爲仁矣。子曰、可以爲難矣、仁則吾不知也。

【讀方】克伐怨欲行はれず、以て仁と爲すべきか。子曰く以つて難しと爲すべし、仁は則ち吾れ知らざるなり。

【字義】○克、勝つことを好む○伐、自ら誇る○怨、怒り怨む○欲、貪欲。

【義解】原憲問うて曰く「人に勝つことを好み、己れの功に誇り、人を怨み、物を貪ることの四つを身に行はないならば、仁といふことが出來ますか」と。孔子曰く「此の四箇條は難かしい事であらう。しかし仁には未だ至らぬものである」と。

子曰、士而懷居、不足以爲士矣。

【讀方】子曰く、士にして居を懷ふは、以て士と爲すに足らず。

【義解】孔子曰く「士にして衣食住の安逸ならんことをのみ欲する者は、節操ある士といふことは出來ない。士たる者は道に志し世を救ふ大望を持たねばならぬから一

身の便安を懐ふ暇がない筈である、」と。

子曰、邦有道、危言危行、邦無道、危行言孫。

【讀方】子曰く、邦道あれば言を危くし行を危くす、邦道無ければ行を危くし、言孫ふ。

【字義】○危、高峻○孫、遜と同じく控え目にする。

【義解】國家に道義が行はれて居れば、正理が通るから、言行共に高くするがよいが、國が亂れて道が行はれない時は、行だけは高くして、言葉は控え目にして無益な禍を被らぬやうにするがよい。

子曰、有德者必有言、有言者、不必有德、仁者必有勇、勇者不必有仁。

【讀方】子曰く、德有る者必ず言あり、言有る者必ずしも德あらず、仁者必ず勇あり、勇者必ずしも仁ならず。

【義解】孔子曰く「德行ある者は其の言ふことも皆道理に叶つた善言である。然し言語を修飾し立派なことを言ふ人が必ず德行の人かといふとさうではない。世には口さきだけの善人が多い。仁者は人のために盡す心が盛であるから如何なる困難をもおものける勇氣がある。しかし勇氣のある人必ずしも仁者といふわけには行かぬ。それは勇氣にも血氣の勇といつて眞の勇氣ではなく、身を殺して仁を成す程の強いものがないものもあるから。」

南宮适問於孔子曰、羿善射、奡盪舟、俱不得其死然、禹稷躬稼而有天下。夫子不答。

南宮适出。子曰、君子哉若人、尚德哉若人。

【讀方】南宮适孔子に問うて曰く、羿は射を善くし、奡は舟を盪す、俱に其の死然を得ず、禹稷躬ら稼して天下を有つ。孔子答へず、南宮适出づ。子曰く、君子なるかな、若の如き人。德を尚ぶかな若の如き人。

【字義】○南宮适、南容ともいひ、又は別人ともいふ○羿、有窮國の君、其の臣寒泥に殺された○奡、寒泥の子、力強く陸地に舟をおす、夏后少康に誅せられた○盪、

推す○稷、舜の時の農を掌る役、周の祖の棄がその役であつた。

【義解】南宮适が孔子に尋ねて曰く「有窮の君羿は射をよくし、羿の家來の子の寒は舟を陸地に推しやる程の力を持つてゐたが、倶に天壽を全くすることが出來なかつた。これに反して夏の先祖の禹王、周の先祖の后稷は稼穡の業を躬らしたけれども後に至つて天下を得た。思ふに徳の高い者は力の強いものに勝るといふわけでありませんか」と。孔子はそれには答へられなかつたが、南宮适が退出した後に「此くの如き人こそ君子といふことが出來る。徳を尚ぶ所の君子人であるよ」と稱讃された。

子曰、君子而不仁者有矣夫、未有小人而仁者也。

【讀方】子曰く、君子にして不仁なる者あらんか、未だ小人にして仁なる者あらざるなり。

【義解】孔子曰く「有徳の君子と雖も仁に志してときに私心のある場合などには不仁の行がないとは限らない。しかし徳のない小人は常に利欲にのみ志してゐるから仁

ある者は一人もないのである」と。

子曰、愛之能勿勞乎、忠焉能勿誨乎。

【讀方】子曰く、之を愛して能く勞する勿らんや、忠にして能く誨ふること勿らんや。

【字義】○愛之、子を愛する○勞、勤勞させること○忠、君に忠を盡す。

【義解】孔子曰く「子を愛するにたゞに撫育寵愛するのみでは眞の愛ではない。宜しく之を勤勞せしめて、心を固くし、難儀に耐へしめることが必要である。君に忠なることも啻に之に從順であるばかりでは眞の忠ではない。能く其の君を教へ導いて善を奬め惡を除かしめなければならない。」

子曰、爲命、裨諶草創之、世叔討論之、行人之羽脩飾之、東里子產潤色之。

【讀方】子曰く、命を爲るに、裨諶之を草創し、世叔之を討論し、行人子羽之を脩飾し、東里の子產之を潤色す。

【字義】○命、辭令、他國へ贈る文書○裨諶世叔、共に鄭の大夫の名○草創、下書きを書く○討論、わるい所を論ずる○行人子羽、行人は役の名、子羽は鄭の大夫公孫揮○脩飾文を美しく飾る○東里子產、東里は地名、子產は鄭の大夫○潤色、一層文采を加へること。

【義解】子曰く、「鄭では他國へ贈る國書を作る時に、裨諶が草稿を起し、世叔が攻究審議し、子羽が脩飾し、子產が更に之れに文采を添へて完成する。かく十分に手を盡くしてするから國交上の失敗をすることがない」と嘆美された。

或問子產。子曰、惠人也。問子西。曰、彼哉彼哉。問管仲。曰、人也、奪伯氏駢邑三百、飯疏食、沒齒無怨言。

【讀方】或ひと子產を問ふ。子曰く、惠人なり。子西を問ふ。曰く、彼をや、彼をや。管仲を問ふ。曰く人なり、伯氏の駢邑三百を奪ひ、疏食を食ひ齒を沒るまで怨言なかりき。

【字義】○惠、人に惠みを施す○子西、楚の公子ともいひ或は鄭の大夫ともいふ○彼哉、彼の如きは批評する程の人物ではない○人也、仁者である○奪伯氏駢邑三百、伯氏は齊の大夫、駢邑は地名、三百は三百戶○沒齒、死ぬまで。

【義解】或人が子產の人物を尋ねたので、孔子曰く「彼は惠み深い男であるが未だ仁者とは評されない」次に子西を尋ねたら「彼の如きは問題にはならぬ」といはれた。次に管仲を尋ねると「管仲は仁者である。齊の大夫伯氏に罪があつたのでその邑三百戶を奪つたけれども、其の行動は公正であつたから、伯氏は邑を奪はれ疏食を食べる程に零落したが、死ぬまで管仲を怨む言葉を發しなかつた。之を以ても管仲の仁がわかる」といはれた。

子曰、貧而無怨難、富而無驕易。

【讀方】子曰く、貧にして怨なきは難く、富んで驕るなきは易し。

【義解】孔子曰く「貧窮に處して不平怨恨のないのは天命を樂しむ人でなければ出

來ないから難かしい。富貴に處して驕奢をしないのは自らを檢束すればよいので、さして困難ではない。」

子曰、孟公綽爲趙魏老則優、不可以爲滕薛大夫。

【讀方】子曰く、孟公綽は趙魏の老と爲れば則ち優ならん、以て滕薛の大夫となすべからず。

【字義】○孟公綽、魯の大夫○趙魏老、老は家老、趙魏は當時に於ては晉の卿で諸侯ではなかつた○滕薛、小諸侯○優、餘りある。

【義解】孔子曰く「魯の大夫孟公綽は淸廉の士であるから、趙魏のやうな勢力はあるが、諸侯のやうに朝覲會同又は治民軍旅の事のない所の老臣としては餘りある位の男である。しかし才力鈍く力量豐富でないから滕薛のやうな小國でも諸侯となれば重大な仕事があるから、其の大夫となつて大任を負ふことは出來ない」と評された。

子路問成人。子曰、若臧武仲之知、公綽之不欲、卞莊子之勇、冉求之藝、文之以禮樂亦可以爲成人矣。曰今之成人者何必然、見利思義見危授命、久要不忘平生之言、亦可以爲成人矣。

【讀方】子路成人を問ふ。子曰く、臧武仲の知、公綽の不欲、卞莊子の勇、冉求の藝の如き、之を文るに禮樂を以てせば、亦た以て成人と爲すべし。曰く、今の成人なる者は何ぞ必ず然らん、利を見ては義を思ひ、危きを見て命を授く、久要平生の言を忘れず、亦以て成人と爲すべし。

【字義】○成人、全人の義、德の完成した人○臧武仲、魯の大夫、名は紇○卞莊子、魯の卞邑の大夫○久要、舊い約束○平生之言、日常の言葉○文、飾る。

【義解】子路が完全な人とは如何、と尋ねたので孔子は「臧武仲の才智、公綽の廉潔と、莊子の力行と、冉求の多能を一人に具備して、且つそれを修飾節和するに禮樂を以てすれば、成人といふことが出來る」といはれたが、更に言をついで「しかしそれは古の成人の義で、今の人には無理な要求である。故に利欲のために不義に陷ること

なく、國家の危急な場合に生命を投げ出し、約束を守ること久しくして平生の言に恥ぢないやうな人ならば、先づ以て成人といつてよからう」といはれた。

子問公叔文子於公明賈曰、信乎、夫子不言、不笑、不取乎。公明賈對曰、以告者過也、夫子時然後言、人不厭其言、樂然後笑、人不厭其笑、義然後取、人不厭其取。

子曰、其然、豈其然乎。

【讀方】子、公叔文子を公明賈に問うて曰く、信なるか、夫子言はず、笑はず、取らずと。公明賈對へて曰く、以て告ぐる者過てり、夫子時にして然して後に言ふ、人その言を厭はず、樂しんで然して後に笑ふ、人其の笑を厭はず、義にして然して後に取る、人その取るを厭はず。子曰く、其れ然らん、豈其れ然らんや。

【字義】○公叔文子、衞の大夫公孫拔○公明賈、衞の人、公明は姓、賈は名○夫子、文子を指す○其然豈其然乎、左樣であるか、しかしどうして左樣なことであり得ようかと疑ひたる言葉。

【義解】孔子が衞の公叔文子のことを公明賈に尋ねていふには「ほんたうであるかね、文子は物も言はず、笑ひもせず又慾欲で取ることがないといふが」と。公明賈は對へるに「それは傳へるものの過りであります。文子といへども言ふべき時には言ひます。しかし冗言をいはないから、それを聞く人は厭はない。又心に樂しい時始めて笑ふから諂笑嘲笑等はないので、笑も厭はしくない。又物を取る時に義に合つた時にのみ取るから、人に嫌がられることはない。」といつた。孔子はあまりのほめようなので「さうかね、しかし其れほどでもあるまい」といはれた。

子曰、臧武仲以防求爲後於魯、雖曰不要君、吾不信也。

【讀方】子曰く、臧武仲防を以て後を魯に爲さんことを求む、君を要せずといふと雖も、吾は信せず。

【字義】○防、地名、武仲の封邑○求爲後於魯、己れの後を立てることを魯君に要求した○要、强いて難題を持ちかけること。

【義解】「臧武仲は罪を得て出でて邾に走つたが、まもなく己が封邑の防に歸つて、己が後嗣を立てんことを魯君に強請した。蓋しきかれなければ防を以て反する考へであつたらう。暴力を以て君に迫つたのではないと辯解しても、私はそれと同様だと思ふ」と孔子はいはれた。

子曰、晉文公譎而不正、齊桓公正而不譎。

【讀方】子曰く、晉の文公は譎にして正しからず、齊の桓公は正にして譎ならず。

【字義】○晉文公、名は重耳○齊桓公、名は小白、二人共に諸侯の盟主となつた譎、いつはる。

【義解】孔子曰く「晉の文公、齊の桓公共に覇者であるが、文公は名分が正しくなく且つ詭詐を用ひた。桓公は名分を正し、且つ詐りを用ひなかつた」と。それは何故といふに文公は名を周の襄王の巡狩にかこつけて諸侯を己が領地に參覲せしめ、桓公は楚を討つた時、朝廷への貢物を怠つた罪を責めて軍を起したやうな例をいつたのである。

子路曰、桓公殺公子糾、召忽死之、管仲不死、曰未仁乎。子曰、桓公九合諸侯、不以兵車管仲之力也、如其仁如其仁。

【讀方】子路曰く、桓公公子糾を殺すや、召忽之に死し、管仲は死せず、曰く未だ仁ならざるか。子曰く、桓公諸侯を九合するに兵車を以てせざるは管仲の力なり、其の仁に如かんや、其の仁に如かんや。

【字義】○公子糾、桓公の庶兄○召忽、管仲と共に糾を保護した人○九合、九度會合させる○不以兵車、武威を用ひない○如其仁、何人が管仲の仁に及ばうか。

【義解】子路の曰く「齊の襄公が公孫無知に弑せられた時、公子小白（桓公）は莒に奔り、公子糾は魯に奔つた。小白は先に齊に歸つて桓公となつた。そして糾が齊に入らうとした時に桓公は魯をして糾を殺さしめたので、召忽は殉死したが、管仲は死なないで桓公に降つた。こんな事で仁人といふことが出來ようか」と。孔子曰く「桓公が諸侯を九回も會合させるに兵力を用ひなかつたことは、管仲の功である。覇を成

就して天下を治に歸せしめた仁は誰か管仲に及ぼうか。その糾に負くの罪は免れないが、此の大功から見れば小疵にすぎない」といはれた。

子貢曰、管仲非仁者與、桓公殺公子糾不能死、又相之。子曰、管仲相桓公、覇諸侯、一匡天下、民到于今受其賜、微管仲、吾其被髪左衽矣。豈若匹夫匹婦之爲諒也、自經於溝瀆、而莫之知也。

【讀方】子貢曰く、管仲は仁者に非ずや、桓公公子糾を殺すに死する能はず、又之を相く。子曰く、管仲桓公を相けて諸侯に覇として一たび天下を匡す、民今に到るまで其の賜を受く、管仲微かりせば、吾れ其れ髪を被り、衽を左にせん。豈匹夫匹婦の諒を爲して溝瀆に自經して之を知らるる莫きが若くならんや。

【字義】○相、輔佐する○覇、諸侯の長となる○匡、正す○微、無し○衽、衣の衿○被髪左衽、夷狄の風俗○諒、小なる信實○自經於溝瀆、堀の中で自らくびれて死ぬこと。

【義解】子貢の曰く「管仲は仁者ではないか、然るに桓公が自分の主人の糾を殺してもそれに殉ずることが出來ないばかりでなく、あめ〳〵桓公に使へて之を輔佐したのは、仁者たるに背くではいか。」孔子曰く「管仲は桓公を輔けて天下の覇者として之を統一して正に歸せしめた。而してその餘慶は今の世にまで及んでゐる。若し管仲がなかつたならば、中國は夷狄に侵略されて吾々は被髪左衽の蠻風になつてゐたであらう。之を思へば名もなき匹夫匹婦がつまらない信義を立てるために溝の中に縊れて死んで世の人に何等知られることもなくしてやむのと比較にはならないではないか。」と。

公叔文子之臣大夫僕、與文子同升諸公。子聞之曰、可以爲文矣。

【讀方】子叔文子の臣大夫僕文子と同じく公諸に升る。子之をきいて曰く、以て文と爲すべし。

【字義】○升諸公、諸は於てと同じ、公朝に出仕すること○文、理に順ひ德を成す

こと。

【義解】公叔文子はその臣の僎といふ者を朝廷に推薦して同僚となつて朝に出仕した。孔子がこれを聞かれて「文子の文たる美徳である」と賞せられた。

【讀方】子衞の靈公之無道也。康子曰、夫如是奚而不喪。孔子曰、仲叔圉治賓客、祝鮀治宗廟、王孫賈治軍旅、夫如是奚其喪。

【讀方】子衞の靈公の無道なるを言ふ。康子曰く、夫れ是の如くにして奚ぞ喪びざる。孔子曰く、仲叔圉は賓客を治め、祝鮀は宗廟を治め、王孫賈は軍旅を治む。夫れ是くの如し、奚ぞ其れ喪びん。

【字義】○康子、魯の大夫季康子○仲叔圉、孔文子○軍旅、兵事、軍は一萬二千五百人、旅は五百人。

【義解】孔子が衞の靈公の無道なことを語られると、季康子がそんなふうで何故に國が喪びないのかと尋ねた。孔子曰く「それは賢臣を用ひて適材を適所におくからである。例へば仲叔圉は賓客に接して國交を修め、祝鮀は宗廟に仕へて祭祀教育の事を掌り、王孫賈は軍事を統べてゐる故に喪びないのである」と。

子曰、其言之不怍、則其爲之也難。

【讀方】子曰く、其の言を之れ怍ぢざれば、則ち之を爲すこと難し。

【字義】○怍、慙づる。

【義解】「其の言ふことを實行しようと思ふならば、其の言に恥ぢないやうに言を謹しむべきである。然るに大言壯語して之を恥ぢないやうならば、實行は到底覺束ないであらう」と孔子は教へられた。

陳成子弑簡公。孔子沐浴而朝、告於哀公曰、陳恒弑其君請討之公曰、告夫三子。孔子曰、以吾從大夫之後、不敢不告也。君曰告夫三子者。之三子告、不可、孔子曰、以吾從大夫之後、不敢不告也。

【讀方】陳成子簡公を弑す。孔子沐浴して朝し、哀公に告げて曰く、陳恒其の君を

弑す、請ふ之を討たん。公の曰く、夫の三子に告げよ。孔子曰く吾れ大夫の後に従ふを以て敢て告げずんばあらず、君曰く、夫の三子者に告げよと。三子に之いて告ぐ。可かず。孔子曰く、吾れ大夫の後に従ふを以て敢て告げずんばあらず。

【字義】　○陳成子、齊の大夫、名は恒、田恒又は田常といふ○簡公、齊の君、名は壬○三子、三家、（孟孫、叔孫、季孫）

【義解】　齊の大夫陳成子が其の君簡公を弑した。孔子は致仕してゐたが、人倫の大變で且つ魯は齊の隣國であるから默視するに忍びず、齋戒沐浴して身を淨めて朝廷に出仕して陳恒を討たんことを哀公に請うた。すると公は決斷力なく且つ權力が三家に移つてゐたので、三家に告げよといはれた。孔子嘆じて曰く、「私は家老の末席を汚してゐるので傍觀するに忍びないで言上したのであるのに、公は自ら斷ずることが出來ないで三家に計れといはれた。實に憂ふべきことである」と。三家に往つてその事を告げたが許さなかつた。孔子は慨嘆更に前言を繰返して曰く「私は大夫の後を汚してゐるので告げざるを得ないで告げたのだが大夫たる三家の人々は人言を待たずして自ら言ふべくに何といふことであらう」と。

子路問事君。子曰、勿欺也、而犯之。

【讀方】　子路君に事ふることを問ふ。子曰く、欺く勿れ、而して之を犯せ。

【字義】　○犯、顏を犯して諫爭する。

【義解】　子路が君に事ふる道を尋ねたので、孔子曰く、「正直を旨として欺き僞ることなく、君の過失については君の顏色を犯して直諫するがよい」と。

子曰、君子上達、小人下達。

【讀方】　子曰く、君子は上達し、小人は下達す。

【義解】　孔子曰く「君子は義に志し修身治國を念とするものであるから、常に向上發展して上へ〳〵と達する。之れ反して小人は唯利欲を事とするから、日に日に道に遠ざかり汚辱に陷りて底止する所がない」と。

子曰、古之學者爲己、今之學者爲人。

【讀方】子曰く、古の學者は己れの爲めにし、今の學者は人の爲めにす。

【義解】孔子曰く「古の學者と今の學者と學問を學ぶ態度を異にしてゐる。古の學者はひたすらに自己の學德を磨くに力め、己れを向上し覺醒することを念とした。然るに今の學者は多く名聞のため榮達のため人にほめられんがために學問をして自己の學德を高め內心の光明を輝やかすことを忘れてゐる」といはれた。

蘧伯玉使人於孔子。孔子與之坐而問焉。曰、夫子何爲。對曰、夫子欲寡其過而未能也。使者出。子曰、使乎、使乎。

【讀方】蘧伯玉人を孔子に使す。孔子之に坐を與へて問ふ、曰く、夫子何をか爲す。對へて曰く、夫子其の過を寡くせんことを欲して未だ能はざるなり。使者出づ。子曰く使なるかな使なるかな。

【字義】○蘧伯玉、衞の大夫、名は瑗○夫子、蘧伯玉のこと○使乎、よい使である

よ。

【義解】蘧伯玉が使者を孔子の許に遣はした。孔子は之に坐席を與へてさて語つて曰く、「伯玉の近況は如何であるか」と。使者曰く「主人は過失を寡くしようと心掛けて居られるが思ふやうになりません」と申した。蓋し謙辭の裏に主人の賢なることを寓したのである。使者が去つた後孔子は嘆美して「よい使者であるよ」と、くりかへしていはれた。

子曰、不在其位、不謀其政。

泰伯篇に出た。

曾子曰、君子思不出其位。

【讀方】曾子曰く、君子は思ふこと其の位より出ださず。

【義解】曾子曰く、「德行ある君子は自己の本分を守りて、妄りに位以外の事に口を入れないのである」と。

子曰、君子恥其言、而過其行。

【讀方】子曰く、君子は其の言を恥ぢて其の行を過ごす。

【義解】孔子曰く「君子は言ふことが行ひに伴はないことを恥ぢて言葉を愼しみ、實行をひたすら努めて言葉よりも行を過ごすやうにする」と。

子曰、君子道者三、我無能焉、仁者不憂、知者不惑、勇者不懼。子貢曰、夫子自道也。

【讀方】子曰く、君子の道は三、我れ能くすることなし、仁者は憂へず、知者は惑はず、勇者は懼れず。子貢曰く、夫子自ら道ふなり。

【字義】○自道、道は言ふ、夫子自身能くせられるのである。

【義解】孔子曰く、「君子の道とする所のもの三ある。然し私はその一つも能くし得ない。その三とは仁智勇の三德であつて、仁者は天命を樂しむ者だから少しも憂へることはない。知者は事理に徹底してゐるから、是非善惡に惑はない。又勇者は義のために直往邁進する。故に懼れる所はない」と。子貢が之をきいて「それは夫子自身をいつてゐるので、夫子に非ずして此の三德を具ふる者があらうか」と評した。

子貢方人。子曰、賜也賢乎哉、夫我則不暇。

【讀方】子貢人を方ぶ。子曰く、賜や賢なるかな、夫れ我は則ち暇あらず。

【字義】○方、比ぶ、比較論評すること。

【義解】子貢は人の長短を比較し、優劣を論評することが好きであつた。そこで孔子はそれを戒しめて「賜やおまへは私より賢つてゐるよ、私は自ら修養するに急で到底人の批評などしてゐる暇がないが、おまへは常に人の論評を事としてゐる、それだけ餘裕綽々なわけだ」といはれた。

子曰、不患人之不己知、患其不能也。

【讀方】子曰く、人の己れを知らざるを患へず、其の能くせざるを患ふ。

【義解】孔子曰く、人の己れの勝れてゐることを知らないのを心配するよりも、先

づ人に知らる本である所の自己の修養に努力するがよいと。之は學而篇里仁篇にも同意義の事を述べてゐる。

子曰、不逆詐、不億不信、抑亦先覺者是賢乎。

【讀方】子曰く、詐を逆へず、不信を億らず、抑亦た先づ覺る者は是れ賢か。

【字義】○逆、迎へる、推量する○億、疑ふ、邪推する○是賢乎、賢人であらう○先覺者、人の情僞を直覺的に悟る人。

【義解】孔子曰く「人と交はるに、人が己を欺くだらうと迎へて推しはからず、又己れの言を信じないだらうと疑つて邪推しなくとも、自然に直覺的に人の情僞を透察し得る人こそ賢者といふべきである」と。

微生畝謂孔子曰、丘何爲是栖栖者與、無乃爲佞乎。孔子曰、非敢爲佞也、疾固也。

【讀方】微生畝孔子に謂つて曰く、丘何すれぞ是れ栖栖たる者か、乃ち佞を爲す無からんや。孔子曰く、敢て佞を爲すに非ざるなり、固を疾むなり。

【字義】○微生畝、世を逃れたる隱者○栖栖、あくせくすること○無乃爲佞乎、佞は辯口を以て人を悦ばせること、即ち言葉巧みに諸侯に取り入るのではないかの意○疾固、疾は憎む固は頑固。

【義解】隱者の微生畝が、孔子の東奔西走世を憂ふるを評して「丘よ汝は何故にあくせくとして奔走するのか、平常汝の憎む所の佞辯を用ひて諸侯に取り入らうとするのではないかといつた。孔子答へて「否我は敢て辯を好み諸侯に取り入らうとする野心があるのではない。唯徒らに自己一身を高く標置して世を捨てるやうな頑固一遍を好まないのである」といはれた。孔子の世を憂へ民を救ふ志の深きを知ることが出來る。

子曰、驥不稱其力、稱其德也。

【讀方】子曰く、驥は其の力を稱せず、其の德を稱す。

【字義】○驥、千里の馬○稱、賞美する。

【義解】孔子曰く「かの千里を走る駿馬の稱讃されるのは單に力の強いばかりでは

ない。其のよく仕込まれて悪い癖のない徳が賞美されるのである。君子の貴ぶ所も亦その才力ではなくて徳である。徳がなければ如何に才力があつても往々其用を誤るのである」と。

或曰、以徳報怨何如。子曰、何以報徳、以直報怨、以徳報徳。

【讀方】　或ひと曰く、徳を以て怨に報いば何如と。子曰く、何を以て徳に報いん、直を以て怨みに報い、徳を以て徳に報ゆ。

【字義】　○徳、恩恵○直、至公にして私なきこと。

【義解】　或人が「怨みに報ゆるに恩を以てしたらばよろしいか」と尋ねた時に、孔子は「怨に報ゆるに恩を以てしたら、恩に報ゆるに何を以てしませうか、怨に報ゆるには公平正直を以てすればよい。そして恩に報いるには恩を以てするが當然である」と教へられた。

子曰、莫我知也夫。子貢曰、何爲其莫知子也。子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎。

【讀方】　子曰く、我を知ること莫きかと。子貢曰く、何爲ぞ其れ子を知る莫きや。子曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す、我を知る者は其れ天か。

【字義】　○尤、咎める○下學而上達、下は人道を學び、上は天理に達す。

【義解】　孔子嘆じて曰く「我を世の人が知らないのである」と子貢曰く「夫子の聖人たることは世人はよく知つてゐるではないか」と。孔子は更に「我は天命に時あり人世に消長のあることを知つてゐるから、天を怨んだり人を怨めたりはしない。たゞ下人道を學び上天理に達することを努めただけである。蓋し天は我をして天理人道を後世に傳へしめやうとして居るのであらうから、我を知る者は獨り天のみである」といはれた。

公伯寮愬子路於季孫。子服景伯以告曰、夫子固有惑志於公伯寮、吾力猶能肆諸市朝。子曰、道之將行也與、命也、道之將廢也與、命也、公伯寮其如命何。

【讀方】公伯寮子路を季孫に愬ふ。子服景伯以て告げて曰く、夫子固より公伯寮に惑志あり、吾が力能く諸を市朝に肆さん。子曰く、道の將に行はれんとするや命なり、道の將に廢れんとするや命なり、公伯寮其れ命を如何せん。

【字義】○公伯寮、魯の人○愬、讒言する○子服景伯、魯の大夫○夫子、季孫をさす○肆市朝、肆は死刑に行つてその骸をさらすこと、大夫以上は朝廷にさらし、士以下は市にさらす。

【義解】公伯寮といふ男が子路をその主人の季孫氏に讒言したので、大夫の子服景伯がそれを怒つて孔子に告げていふには「季孫は公伯寮の言を信じて子路を疑ふ心がある。或は子路に禍が及ぶかも知れない。それにしても惡むべきは公伯寮である。私の力はよく彼を誅することが出來るから子路のために讒佞者を血祭りにしませうか」といつた。孔子はこれを聞いて「道の行はれるのも道の廢るのも天命で如何ともしがたい。一公伯寮が有つてもなくとも天命ならば止むを得ない。誅する程のことはない」といはれた。

子曰、賢者辟世、其次辟地、其次辟色、其次辟言。

【讀方】子曰く、賢者は世を辟く、其の次は地を辟く、其の次は色を辟く、其の次は言を辟く。

【義解】孔子曰く「第一の賢者は道の行はれないのを見て世を辟けて隱遁する。次の賢者は亂國を辟けて治國に移る、次は地を辟けて退くのである。次は禮貌の劣へたるを見て退き、次は忠言のきかれないによつて辟けて退くのである。」

子曰、作者七人矣。

【讀方】子曰く、作つ者七人。

【字義】○作者、起つて世を辟ける者。

【義解】子曰く「世を辟けて起ち去りし者古來七人ある」と。此の七人は明かでないが、一說に伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連ならんといふ。

子路宿於石門。晨門曰、奚自。子路曰、自孔氏。曰是知其不可而爲之者與。

【讀方】子路石門に宿す。晨門の曰く、奚れ自ぞ。子路曰く、孔氏よりす。曰く、是れ其の不可を知つて之を爲す者か。

【字義】○石門、魯城の外門の名○晨門、晨に門を開くことを職とする者。

【義解】子路が石門に宿つて朝門の開くを待つて入らうとすると、關守の曰く、どこから來たのか。子路曰く「孔氏から來た」と。關守曰く、「さては道の行はれざるを知りながらしかも天下を奔走して道を行はうとする連中か」と冷評した。關守は老子一派の隱者であらう。

子擊磬於衞。有荷蕢而過孔氏之門者、曰、有心哉、擊磬乎。既而曰、鄙哉硜硜乎、莫己知也、斯已而已矣、深則厲淺則揭。子曰果哉、末之難矣。

【讀方】子磬を衞に擊つ。蕢を荷うて孔氏の門を過ぐる者あり、曰く、心あるかな磬を擊つや。既にして曰く、鄙しいかな、硜硜乎として己を知ること莫し、斯れ已まんのみ、深ければ則ち厲し、淺ければ則ち揭す。子曰く、果なるかな、之を難しとする末し。

【字義】○磬、石製の樂器○荷蕢、蕢はモッコ、荷はになふ○硜硜乎、堅苦しくて時宜に通じないさま○深則厲淺則揭、詩の衞風匏有苦葉の篇にある。厲は裳をぬいで渡ること、揭は裳をかゝげて渡ること○果、果斷○末、無い。

【義解】孔子が衞の國に居つた時磬をうつてゐると、モッコを擔いで門前を通る者があつたが、「奥ゆかしいな」と嘆美した。しばらくして曰く「鄙陋なる磬の音かな頑固にして時宜に通ぜず身の程を知らない者だ、道が行はれなければ世をさけて隱れたらよいのに。詩にも水が深ければ裳をとりて渡り、水が淺ければ裳をかゝげて渡るとある通り、時によつて進退を異にすべきであるに、彼は全く時宜を知らぬ者である」と批難した。孔子は「それは餘りに果斷にすぎた短見である。彼の如く世を見限つて隱退することは難かしことではないが、私には國家を捨てて身を潔くすることが出來

ない」といはれた。

子張曰、書云、高宗諒陰三年不言、何謂也。子曰何必高宗、古之人皆然、君薨百官總己、以聽於冢宰三年。

【讀方】子張曰く、書に云ふ、高宗は諒陰三年言はずと。何の謂ぞや。子曰く、何ぞ必ずしも、高宗のみならんや、古の人皆然り、君薨ずれば百官己れを總べて以て冢宰に聽くこと三年。

【字義】○書、周書無逸篇○高宗、商王武丁○諒陰、天子の喪に居る所○不言、政を言はない○總己、己の事務をすべくくつて○聽冢宰、上卿の差圖を受ける。

【義解】子張が尋ねて曰く、「書經に高宗が喪に居ること三年、その政事について一言も發せられなかつたといふが、どういふわけですか」と。孔子曰く「それは獨り高宗に限つたことではない。古の人は皆さうした。主君が薨ずれば百官は己れの官職を引きまとめて上卿の命令をきくこと三年、上卿は君に代つて政務をみるから政事は

荒廢することはない」と。

子曰、上好禮、則民易使也。

【讀方】子曰く、上禮を好めば民使ひ易し。

【義解】子曰く、「上のなす所は下之に做ふで、上の者が禮を好めば下の民も亦禮を好んで分を守り上命に違はない。故に之を使ふに骨折れない」と。

子路問君子。子曰修己以敬。曰如斯而已乎。曰修己以安人。曰如斯而已乎。曰、修己以安百姓、修己以安百姓、堯舜其猶病諸。

【讀方】子路君子を問ふ。子曰く、己を修めて以て敬す。曰く斯の如きのみか。曰く己を修めて以て人を安んず。曰く斯くの如きのみか。曰く己れを修めて以て百姓を安んず、己を修めて百姓を安んずるは、堯舜も其れ猶ほ諸を病めり。

【義解】子路が君子とは如何なる人かと尋ねた。孔子答へて「己れの身を修めて以て事を敬してゐろそかにしない」と子路は不足に思つて「唯其れだけで宜しいか」と

孔子「己れを修めて人を安んずることである」と答へられると、子路更にそれのみで足るかと反問したから、孔子は「己れを修めて百姓を安心させるといふことは彼の堯舜さへもそれを困難とした所で、之れ以上に加ふべきことはない」と曰はれた。

原壤夷俟。子曰、幼而不孫弟、長而無述焉、老而不死、是爲賊。以杖叩其脛。

【讀方】原壤夷して俟つ。子曰く、幼にして孫弟ならず、長じて述ぶることなく、老いて死せざるは是を賊と爲す。杖以て其の脛を叩く。

【字義】○原壤、魯の人、孔子の舊友○夷俟、立て膝をしてうづくまつて孔子を待つ○無述、先王の道を述べ傳へることがない○孫弟、長者によく使へること○賊、德を害ふ○脛、足の骨、ハギ。

【義解】原壤といふ男が孔子の來るを立て膝して待つてゐた。蓋し人を迎へるには立つて迎へるが禮である。孔子が來つて、「幼にして長者に不遜不弟、長じて何等道を述べ傳へることなく既に老いて猶ほ死せずして禮法を無視してゐるのは德を害ふ賊である」といつて、持つてゐた杖を以て原壤のハギを擊つてその禮をなみするを責めた。

闕黨童子將命。或問之曰、益者與。子曰、吾見其居於位也、見其與先生並行也、非求益者也、欲速成者也。

【讀方】闕黨の童子命を將ふ。或人之を問うて曰く、益者か。子曰く、吾其の位に居るを見る、其の先生と並び行くを見る、益を求むる者に非ず、速に成らんことを欲する者なり。

【字義】○闕黨童子、闕といふ邑の名、童子は未だ冠せざる者○將命、將は行ふ、主と賓との言を取次ぐこと○先生、己れより先に生れた人○欲速成、早く成人の眞似がしたいと思ふ。

【義解】闕黨の童子が孔子の家で取次役をしてゐたから、或人が「かの童子は敏才にして益を求むる者であるか」と問うた。孔子曰く「彼は禮を知り學を勤む益者では

ない。童子の分としては座の隅に坐すべきに成人と座位を等しくし、又成人の後に隨從すべきに、先生長者と並んで行くのを見た。之を見ても彼は學んで益を求めんとする者ではなくて、早く成人の眞似のしたい者である」と。蓋し取次の役をさせて禮法にならはしめようとする意であらう。

衞靈公第十五

此の篇すべて四十章。

衞靈公問陳於孔子。孔子對曰、俎豆之事、則嘗聞之矣、軍旅之事、未之學也、明日遂行。「在陳絕糧、從者病莫能興。子路慍、見曰、君子亦有窮乎。子曰、君子固窮、小人窮斯濫矣。

【讀方】衞の靈公陳を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、俎豆の事は則ち嘗つて之を聞けり、軍旅の事は未だ之を學ばず、明日遂ひに去る。陳に在りて糧を絕つ、從者病みて能く興つことなし。子路慍り、見えて曰く、君子も亦窮する有るか。子曰く、君子固より窮す、小人窮すれば斯に濫す。

【字義】○陳、軍陣の組織○俎豆、俎も豆も宗廟の祭りに食物を盛る器○軍旅、軍事○在陳絕糧、陳といふ國で食糧を得ることが出來なかつた○興、起つ○慍、內心不快の樣子のあること○濫、禮法の外に放出する、ミダレル。

【義解】衞の靈公が孔子に軍陣の事を問はれた。孔子は其の志が戰爭にあることを察して對へるには「俎豆をつらねる禮法は之を學びましたが、不幸にして戰爭の事は存じません」といつて翌日衞の國を去つた。そして楚に行かうとして陳といふ國を通過された際に兵に圍まれて糧食を得ることが出來ない爲めに從者は饑ゑ病で起居が自由にならなかつた。子路は怫然として問うて曰く「道を行ふ君子も亦かくの如く窮することがあるか」と孔子答へて君子と雖も勿論窮しないとはいはない。かゝる亂世では窮することも止むを得ない。しかし君子は天命を樂しむから身を正し道を守つて濫

に至らないが、少人は天命を知らないから困窮すれば禮の外に脫線して濫するやうになる」といはれた。

子曰、賜也、女以予爲多學而識之者與。對曰、然、非與。曰、非也、予一以貫之。

【讀方】子曰く、賜や女予を以て多く學びて之を識る者となすかと。對へて曰く、然り、非なるか。曰く、非なり、予れ一以て之を貫く。

【字義】○賜、子貢の名○一以貫之、一は忠恕。

【義解】孔子が子貢に向つて「賜よ、汝は私を見て、多く學んで一々之を知り覺えた者とするのか」と。子貢曰く、「さう思ひますが、ちがひますか」と。孔子曰く「ちがつてゐる。私は唯一筋の忠恕の道を貫き通してゐるだけで、一々之を知り覺えるのではない」と。

子曰、由、知德者鮮矣。

【讀方】子曰く、由や、德を知る者鮮し。

【義解】孔子が子路に向つて「由や方今天下の人德を知り之を行ふ者が殆どない」と嘆ぜられた。

子曰、無爲而治者、其舜也與、夫何爲哉、恭己正南面而已矣。

【讀方】子曰く、無爲にして治むる者は夫れ舜か、夫れ何をか爲せる、己を恭しうして正しく南面するのみ。

【字義】○無爲、自ら手を下さないこと○南面、天子の玉座。

【義解】孔子曰く「なす事無きが如くにしてよく世を治めたのは舜であるよ。彼は自ら恭しくして賢臣を擧げて之に任じ、己れは南面玉座についてゐるばかりであつた」と舜の德を贊した。

子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、言不忠信行不篤敬、雖州里行哉、立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡也、夫然後行。子張書諸紳。

【讀方】子張行はれんことを問ふ。子曰く、言忠信、行ひ篤敬ならば蠻貊の邦と雖

も行はる。言忠信ならず、行ひ篤敬ならざれば、州里と雖も行はれんや。立つては則ち前に參なるを見る、輿に在れば則ち其の衡に倚るを見る。夫れ然る後に行はれん。子張諸を紳に書す。

【字義】○問行、我思ふ事の行はるる仕方を尋ねる○蠻貊、蠻は南の野蠻人、貊は北の北狄○州、二千五百家○參、我と忠信篤敬が三つ參列する○衡、軛○紳、大帶。

【義解】子張が如何にせば道が行はれ世に用ひられべきかを尋ねた。孔子曰く「言ふ所が誠で、行ふ所が愼しみ深ければ人も亦之を信じ之を敬す。故に南蠻北狄の野蠻人の邦に於ても行はれる。しかし言ふことが誠でなく、行ふ所が愼しみなければたとへ州里のやうな小邑でも用ひられることはない。而して此の忠信篤敬は寸時も忘れることなく、立つ時にはこの二つが我と並んで參となるやうに、車に乘つてゐる時はこの二つが軛に倚つてゐるやうに見えて、少しも自己を離れないやうならば、何事も滯ることなく行はれるであらう」と。子張はこの事を大帶に書して自ら戒めた。

子曰、直哉史魚、邦有道如矢、邦無道如矢、君子哉、蘧伯玉、邦有道則仕、邦無道則可卷而懷之。

【讀方】子曰く、直なるかな史魚、邦道有れば矢の如く、邦道無きも矢の如し。君子なるかな蘧伯玉邦道有れば則ち仕へ、邦道無ければ則ち卷いて之を懷にすべし。

【字義】○史魚、史官の役にある子魚、衛の大夫○如矢、直言すること○卷而懷之、まいて之を懷に入れるやうによく自らかくすこと。

【義解】孔子が衛の大夫子魚を評して「直なるかな史魚や、彼は邦に道あるも亦道なきも直言して憚からない、正を守りて屈せざること恰も矢の直きがやうである。」と又蘧瑗を評して「君子なるかな、蘧伯玉や、彼は邦に道が行はるれば出でて仕へ、邦に道が行はれなければ卷いて懷に入れるやうにかくれて身を退く」と曰はれた。

子曰、可與言、而不與之言、失人、不可與言、而與之言、失言、知者不失人、亦不

失言。

【讀方】子曰く、與に言ふべくして之と言はざれば、人を失ふ、與に言ふべからずして之と言へば言を失ふ。知者は人を失はず、亦言を失はず。

【義解】孔子曰く「與に交り語るに足るべき賢者と會つて與に語らなければ友を得ることが出來ない。又與に語るに足らぬ不肖者と會つてそれと語れば無益な勞で折角のよい言を失ふことになる。知者は語るべき人に語り、語るべからざる人とは言を交へない。故に人を失ふこともなく又言を失ふこともない」と。

子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁。

【讀方】子曰く、志士仁人は生を求めて以て仁を害することなし、身を殺して以て仁を成すことあり。

【字義】○志士、仁に志ざす人○仁人、仁者。

【義解】子曰く「志士仁人といはれる人は、仁を行ふことを己が任務と考へてゐるから生命の安きを求めるために、仁義の道を害することはない。時には仁を成すために己が身を犧牲にして仁義のために盡すこともある」と。

子貢問爲仁。子曰、工欲善其事、必先利其器、居是邦也、事其大夫之賢者、友其士之仁者。

【讀方】子貢仁を爲すことを問ふ。子曰く、工其の事を善くせんと欲せば、必ず先づ其の器を利す、是の邦に居るや、其の大夫の賢者に事へ、其の士の仁者を友とす。

【字義】○工、大工彫刻者等の匠人○利其器、其の道具をよくきれるやうに磨ぐ○是邦、その居る所の邦。

【義解】子貢が仁を爲す方法を尋ねたので、孔子は答へて、「大工のやうな職人が其の仕事を精巧にしようとするならば、先づ其の道具をよくきれるやうにしなければならぬ。仁を爲さうとする人も亦之と同じく交はる友がよくなければ自ら惡習に染んで仁を爲すことが出來ない。故にその邦に居つては、其の國の賢大夫に事へ其の士の

仁者を友として、仁に進めば、仁をなすことが出來るであらう」と曰はれた。

顔淵問爲邦。子曰、行夏之時、乘殷之輅、服周之冕、樂則韶舞、放鄭聲、遠佞人、鄭聲淫、佞人殆。

【讀方】　顔淵邦を爲むるを問ふ。子曰く、夏の時を行ひ、殷の輅に乘り、周の冕を服し、樂は則ち韶舞、鄭聲を放ち、佞人を遠ざく、鄭聲は淫なり、佞人は殆し。

【字義】　○問爲邦、邦は謙辭で天下を治むることを尋ねた○夏之時、時は曆、曆は三代の中で夏の曆が最も農作に便であつた○殷之輅、輅は大車で夫子の乘る車、殷の輅は木製で質素なるものであつた○周之冕、冕は冠周が儀制の最もよく整つた時○韶舞、韶は舜の時の音樂、音は聲と舞とを兼ねる○鄭聲、鄭國の音樂○佞人、口辯を以て人におもねる人○淫、みだら○殆、危險○放、禁止。

【義解】　顔回が治國の法を尋ねたので孔子は「曆は夏の曆を用ゐて農人に便にして、車は殷の如く質素を旨とし、禮は周制のよく整つてゐるのを用ひ、音樂は舜の時の善美を盡したものを用ひる。そして鄭聲は淫靡で人心をとらかすから之を禁止し、佞人は辯口を以て人におもねり國家を危くするものだから之を遠ざけて用ひないやうにする」と答へられた。

子曰、人無遠慮、必有近憂。

【讀方】　子曰く、人遠き慮なければ、必ず近き憂あり。

【義解】　孔子曰く「人は百年の後、千里の外を明察するの遠き思慮がなければならぬ。此の遠きを考へる大計がなければ姑息の事をするから眼前脚下の小憂患に惱まされて、常に小さな苦悶憂慮のたえる暇がない」と。

子曰、已矣、吾未見好德如好色者也。

【讀方】　子曰く、已ぬるかな、吾れ未だ德を好むこと色を好むが如き者を見ず。

此の章、子罕篇にある。唯だ「已矣乎」の一句が多い。

子曰、躬自厚而薄責於人、則遠怨矣。

【讀方】子曰く、躬自ら厚くして薄く人に責むれば、則ち怨に遠ざかる。

【字義】○躬自厚、躬は自己、自ら責むること厚いこと。

【義解】己を責むること嚴にして厚く、人を責むるや寛にして薄ければ、人にも怨まれることなく、又自己にも益する所が多い。

子曰、臧文仲其竊位者與、知柳下惠之賢、而不與立也。

【讀方】子曰く、臧文仲は其れ位を竊む者か、柳下惠の賢を知りて、しかも與に立たざるなり。

【字義】○臧文仲、魯の大夫○柳下惠、魯の大夫展獲、字は禽、邑を柳下に食み、諡して惠といふ○與立、共に並んで朝廷に立つ。

【義解】孔子曰く「魯の大夫臧文仲久しく僖公文公を助けて政を執つて居つた。凡そ上卿の職に居る者は賢者を引き上げて君に薦むべきであるのに、臧文仲は柳下惠の賢を知りながら之を薦めて共に朝廷に立つて政をしなかつたのは、位を竊む權勢の賊

といつてもよい」と譏つた。

子曰、不曰如之何如之何者、吾末如之何也已矣。

【讀方】子曰く、之を如何、之を如何と曰はざる者は、吾れ之を如何ともする末きのみ。

【字義】○如之何、之を如何にしたらよいかと求める○末無しと同じ。

【義解】孔子曰く「之を如何、之を如何と思慮工夫を運らして常に疑問を發する者は之を教へ導くことが出來るが、少しも工夫をこらすことなく人にも問をかけない者は如何とも濟度し難いものである」と。

子曰、群居終日、言不及義、好行小慧難矣哉。

【讀方】子曰く、群居終日、言義に及ばず、好んで小慧を行ふは難いかな。

【字義】○行小慧、猿知慧を行ふ、小細工をなすこと○難矣哉、德に入ること難い。

【義解】孔子曰く、相集まつて雜談すること終日の久しきにわたつてしかも言ふ所道義のことに觸れ及ばず、小智を弄し一時を糊塗する者は德に入ること難く、終に禍を免かれないであらう。

子曰、君子義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之、君子哉。

【讀方】子曰く、君子は義以て質と爲し禮以て之を行ひ、孫以て之を出し、信以て之を成す、君子なるかな。

【字義】○質、本質○孫、謙遜○信、信實。

【義解】君子たる者は義を以て本質となし、行ふに禮を以てし、言葉は謙遜を旨とし、事を成す誠實を以てする。これ君子たる者の本分である。

子曰、君子病無能焉、不病人之不己知也。

【讀方】子曰く、君子は能くする無きを病ふ、人の己を知らざるを病へず。

【義解】君子は己れの修養の足らないことを憂へて、敢て人の己れを知らないことを氣にかけない。

子曰、君子疾沒世而名不稱焉。

【讀方】子曰く、君子は世を沒へて名稱せられざるを疾む。

【字義】○疾、愧ぢ惡む○沒世、身を終へて死後に至る迄。

【義解】孔子曰く「君子は德を以て立つ人であるから、用ひると用ひられざるとに拘はらず名譽は自然に揚るものである。たとへ生前に於て名をうたはれなくとも死後に於て名譽が永く傳へられるのである。若し生前も死後も共に名の何等聞ゆることなきは君子たる資格がない。之は誠に愧づべきことであるから、眞の名の爲めに德を積み行を修めなければならぬ」と。

子曰、君子求諸己、小人求諸人。

【讀方】子曰く、君子は諸を己に求め、小人は諸を人に求む。

【字義】○求諸己、すべてのことを己れ自身に反求すること。

【義解】孔子曰く「君子は己を責むること厚く、一切の事之を己れに反求してその至らざるを心配する。これに反して小人は之を己れに求めずしてすべて人に求めて、この失敗は彼にある、この失行は其のためであると、人に總ての責任を衣せて己れを責めることを忘れてゐる」と。

子曰、君子矜而不爭、群而不黨。

【讀方】子曰く、君子は矜すれども爭はず、群すれども黨せず。

【字義】○矜、自ら持することの嚴しいこと○黨、附和雷同すること。

【義解】孔子曰く「君子は自ら持することが嚴であるけれども決して人を責めることはないから、人と接して爭ふことはない。又人と群居して相和するけれども、自ら守る所があるから決して他に附和雷同するやうな輕薄な事はしない」

子曰、君子不以言擧人、不以人廢言。

【讀方】子曰く、君子は言を以て人を擧げず、人を以て言を廢せず。

【義解】孔子曰く「君子はいふ事の立派に正しいことを以てそのいふ人を擧げ用ひない。何故なれば、言は立派でも行の伴はない者があるからである。又その人が正しくない人でも、そのいふ事が理にあふ善言であれば、之をすてないでその善言を取る。君子はすべて公平で且つその實質を取るのである」と。

子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎、己所不欲、勿施於人。

【讀方】子貢問うて曰く、一言にして以て終身之を行ふ可き者有りや。子曰く、其れ恕か、己れの欲せざる所は、人に施すこと勿れ。

【義解】子貢が「一言にして終身之を行ふべき者は何か」と問うた。孔子答へて「それは恕である。恕は思ひやることであつて、己の欲しないことは、人亦之を欲しないから之を人にしむけない。又己れの欲する所は人に向て施す。」

子曰、吾之於人也誰毀誰譽、如有所譽者、其有所試矣、斯民也、三代之所以直道而行也。

【讀方】子曰く、吾の人に於けるや、誰をか毀り、誰をか譽めん、如し譽むる所の者あらば、其れ試みる所有り、斯の民や、三代の直道して行ふ所以なり。

【字義】○毀、人を惡るくいふ○譽、人を善くいふ○試、試驗する○斯民、今の世の民○三代之直道而行、三代は夏殷周、正しき道を行ふ。

【義解】孔子曰く「私は公平無私である故に嫌ひだから惡くいひ、好きだから善くいふといふやうな事はしない。如し之を賞めるならば必ずその人の實を試みての上で褒める。今の世の民は三代の明君正しい道を以て導びかれ、而してその正道を踏み行つた人民である故に、之を導けば必ず善良なるものとなるであらう。」

子曰、吾猶及史之闕文也、有馬者借人乘之、今亡矣夫。

【讀方】子曰く、吾猶ほ史の闕文に及ぶ、馬ある者は人を借りて之に乘せしめたり、今は亡きかな。

【字義】闕文、疑はしい箇所をかく○借人乘之、馬の上手な人を借りて馬を乘りこなさせた。

【義解】孔子曰く、「私の若い頃は記錄の物を寫すに疑はしい所は闕けておいて後で知つてゐる人に尋ねた。又馬を持つてゐてまだ十分乘りなれない者は、上手な人の手を借りて乘りならせて貰つた。然るに今やかゝる美風は衰へて、「疑はしい所があつても之をあげて人にきくことを恥ぢて勝手な字を書いてごまかし、馬乘りがまづくとも人手をかりて乘りこなさせることをしないで、馬の上手な眞似をしてゐる。誠に殘念な世の中である」と。

子曰、巧言亂德、小不忍則亂大謀。

【讀方】子曰く、巧言は德を亂る、小忍びざれば則ち大謀を亂る。

【義解】孔子曰く「言を巧みにする者は惡を美化し不正を尤もらしく言ひくるめる。故に巧言は德言に似てゐるだけ多く德を亂るものである。又忍びない心は仁者のやうであるが小事に忍ぶことの出來ない者は大小輕重の判斷を誤り、遂には國家將來の大

謀を誤ることがある。例へば宋襄の仁の如き小事を忍びないために大敗を招いた類である。

子曰、衆惡之必察、衆好之必察焉。

【讀方】子曰く、衆之を惡むも必ず察し、衆之を好むも必ず察す。

【義解】孔子曰く「衆人の評は大體に於て間違は少いがしかし必ずしも當らない。それは群集心理に支配されて、時に善人をも惡人の如く思ひ、惡人に煽動せられて善人の如く思ひ込むやうな事があるから、衆人が之を好むも又た之を惡むもよく〳〵其の人物の眞價を見きはめてその眞を察する」と。

子曰、人能弘道、非道弘人。

【讀方】子曰く、人能く道を弘む、道人を弘むるに非ず。

【義解】孔子曰く、道の行はれるのは人による。之を行ふ人弘むる人がなければ、道は死物で如何ともすることは出來ない。要は人によりて活用せられ擴大せられるものである。

子曰、過而不改、是謂過矣。

【讀方】子曰く、過つて改めざる、是を過といふ。

【義解】孔子曰く「人には知らずして行ふ過失がある。故にその過失に氣がついたら過むるに憚かることはない。然るに過と知りつつその非を遂げようとするのは眞の過である。」

子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢、以思、無益、不如學也。

【讀方】子曰く、吾嘗て終日食はず、終夜寢ねず、以て思へども益なし、學ぶに如かざるなり。

【義解】孔子曰く「私は嘗つて物の道理を知るために一日食はず一夜眠らずに考へたが、さて何の役にも立たなかつた。物の道理を深く究めるには唯思辨するばかりではいけない。やはり廣く古人の言說を學んで修養に努めなければならぬ。」

子曰君子謀道、不謀食、耕也餒在其中矣、學也祿在其中矣、君子憂道不憂貧。

【讀方】子曰く、君子は道を謀りて、食を謀らず、耕すも餒其の中に在り、學ぶも祿其の中に在り、君子は道を憂へて貧を憂へず。

【字義】○謀、營み求める○餒、うゑ○食、食祿。

【義解】孔子曰く、「君子は道を得ることを求めて敢て食を得ることを求めない。農夫の田を耕すは食のためであるが、時に五穀がみのらないで餒ゑることがある。君子の學ぶは食祿の爲めではないが、學が成就すれば用ひられて食祿を自然に得るやうになる。しかし君子は食のために心配せずひたすら道を得ることに務むべきで、貧を憂へるやうではいけない。」

子曰、知及之、仁不能守之、雖得之、必失之。知及之、仁能守之、不莊以涖之、則民不敬。知及之、仁能守之、莊以涖之、動之不以禮、未善也。

【讀方】子曰く、知之れに及べども、仁之を守る能はざれば、之を得と雖も、必ず之を失はん。知之に及び、仁能く之を守るも、莊以て之に涖まざれば、則ち民敬せず。知之に及び、仁能く之を守り、莊以て之に涖むも、之を動かすに禮を以てせざれば、未だ善からざるなり。

【字義】○知及之、知は智、及は到る、之は君たる位、即ち治國安民の道を知ること○涖、臨む○禮、禮讓○莊、莊嚴。

【義解】孔子曰く「君たる者の備ふべきは、知と仁と莊と禮の四つである。知は君たる道を知るも仁以て民を愛することが出來なければその位を失ふ。知、仁之をよくするも莊嚴なる容貌を以て民に臨まなければ、民の侮りをうける。又知、仁、莊の三を得ても禮を以て人民を動かし使ふことが出來なければ完全といふ譯にはゆかない。

子曰、君子不可小知、而可大受也、小人不可大受、而可小知也。

【讀方】子曰く、君子は小知すべからずして大受すべし、小人は大受すべからずして小知すべし。

【字義】 ○小知、小さき事がよく分る○大受。大なる事を引受ける○小人、小才ある者。

【義解】 孔子曰く「君子は器量が大きくて小事には適しない場合が多いから、小さな事件に當らせないで、大なる責任を負ふべき事業を引受けさせるがよい。又小人とて小才ある者は、器量が小さいから、小事には適するが大事に當らせてはならない」といはれた。蓋し人を用ひる法を示された言。

子曰、民之於仁也、甚於水火、水火吾見踏而死者矣、未見踏仁而死者也。

【讀方】 子曰く、民の仁に於けるや、水火よりも甚だし、水火は吾れ踏みて死する者を見たれども、未だ仁を踏みて死する者を見ざるなり。

【字義】 ○仁、仁政○甚於水火、水と火の必要なよりも更に大切である。

【義解】 孔子曰く「民の仁政を欲するは水や火を求めるよりも猶ほ切なるものがある。而して水火は大切なものだが、水を踏みて溺れ、火を踏んで、焚け死ぬ者がある。而るに仁は益あつて害なく、何人も仁を踏んで死ぬ者はない。」

子曰、當仁不讓於師。

【讀方】 子曰く、仁に當りては師に讓らず。

【義解】 孔子曰く「弟子は師匠に讓るが普通であるが、仁に志し仁を行ふに於ては、決して師に讓つて遲疑する必要はない。直往邁進すべきである。」

子曰、君子貞而不諒。

【讀方】 子曰く、君子は貞にして諒ならず。

【字義】 ○貞、正を固守する○諒、是非を擇ばずして信を守る。

【義解】 孔子曰く「君子は正を守つてその操守をかへることはないが、一旦約したことは正邪善惡にかゝはらず之を固守するやうな頑固な信を執らない。過と知れば改めるに憚らない。」

子曰、事君、敬其事、而後其食。

【讀方】子曰く、君に事ふるには、其の事を敬して其の食を後にす。

【義解】孔子曰く「君に仕へるには其の職責を重んじて之を大切に取扱ひ、食祿報酬のことは後廻しにする」と。

子曰、有教無類。

【讀方】子曰く、教ありて類なし。

【字義】○類、善惡の種類。

【義解】孔子曰く「人の性は相近く、始めから善惡の區別はないものであるが、教育するとしないとによつて善惡がわかれる。故に類は無くして教ありといふべきである。」と。

子曰、道不同、不相爲謀。

【讀方】子曰く、道同じからざれば、相爲めに謀らず。

【義解】孔子曰く「異教異主義の者は互に立場を異にし解釋を異にする者であるから、共に相談しても意見が合ふことなく、相謀つても無益である。」

子曰、辭達而已矣。

【讀方】子曰く、辭は達するのみ。」

【義解】孔子曰く「文章言語はその言はんとする趣旨が十分に達すればそれで十分に目的を達したものである。敢て粉飾華麗を弄するに及ばない」と。

師冕見、及階、子曰階也、及席、子曰席也、皆坐、子告之曰、某在斯、某在斯。師冕出。子張問曰、與師言之道與。子曰、然、固相師之道也。

【讀方】師冕見ゆ、階に及べり、子曰く、階なりと、席に及べり、子曰く、席なりと、皆坐す、子之れに告げて曰く、某は斯にあり、某は斯にありと。師冕出づ。子張問ひて曰く、師と言ふの道なるかと。子曰く、然り、固より師を相くるの道なり。

【字義】○師冕、冕といふ盲人の樂師○相、たすける。

【義解】盲人の樂師冕が孔子に會見を求めて孔子の宅を訪問した。冕が上り段に近

づくと、孔子はそこは上り段だと注意し、坐席に近づくと、それは坐席だと注意された。冕が坐につくと一同の者も坐についた。すると孔子は誰々はここに、誰々はそこにと坐席を教へた。會談の後師冕が退出すると、子張が「今のは盲人と話す道か」と尋ねたので、「然り、盲目の樂師を助け世話する方法である」と答へられた。

季氏第十六

此篇すべて十四章。前章についで聖人の不遇及衰世の事を多くのせてゐる。前章に君の惡（衞靈公）を明かにし、本章に臣の凶（季氏）を述べてゐる。

季子將伐顓臾。冉有季路見於孔子曰、季氏將有事於顓臾。孔子曰、求無乃爾是過與、夫顓臾、昔者先王以爲東蒙主、且在邦域之中矣、是社稷之臣也、何以伐爲。冉有曰、夫子欲之、吾二臣者皆不欲也。孔子曰、求、周任有言、曰、陳力就列、不能者止、危而不持、顚而不扶、則將焉用彼相矣。且爾言過矣、虎兕出於柙、龜玉毀於櫝中、是誰之過與。冉有曰、今夫顓臾、固而近於費、今不取、後世必爲子孫憂。孔子曰、求、君子疾夫舍曰欲之、而必爲之辭。丘也聞、有國有家者、不患寡、而患不均、不患貧而患不安、蓋均無貧、和無寡、安無傾。夫如是、故遠人不服、則修文德以來之、既來之則安之。今由與求也、相夫子遠人不服而不能來也、邦分崩離析、而不能守也、而謀動干戈於邦內、吾恐季孫之憂、不在顓臾、而在蕭牆之內也。

【讀方】季氏將に顓臾を伐たんとす、冉有季路孔子に見えて曰く、季氏將に顓臾に事あらんす。孔子曰く、求乃ち爾是れ過つこと無からんや、夫れ顓臾は昔は先王以て東蒙の王となし、且つ邦域の中にあり、是れ社稷の臣なり、何を以てか伐つことを爲さん。冉有曰く、夫子之を欲す、吾れ二臣の者皆欲せざるなり。孔子曰く、求、周任言へることあり、曰く、力を陳べて列に就き、能はざれば止む、危うして持せず、顚して扶けずんば則ち將た焉にか彼の相を用ひんと。且つ爾が言過てり、虎兕押より出で、龜玉櫝中に毀るれば、是れ誰の過ぞや。冉有曰く、今夫れ顓冉は固して費に近し、今

取らされば、後世必ず子孫の憂と爲らん。孔子曰く、求、君子は夫の之を欲すといふを舍きて、必ず之が辭を爲るを疾ひ。丘聞く、國を有ち家を有つ者は寡なきを患へずして均しからざるを患ふ、貧しきを患へずして安からざるを患ふ、蓋し均しければ貧しきこと無く、和なれば寡なきことなく、安ければ傾くことなし、夫れ是くの如し、故に遠人服せざれば、則ち文德を修めて以て之を來たす、既に之來せば則ち之を安んず。今由と求とは夫子を相けて遠人服せず、而して來すこと能はざるなり、那分崩離析して守ること能はざるなり、而して干戈を邦內に動かすを謀る、吾れ恐る、季孫の憂は顓臾在らずして蕭牆の內にあり。

【字義】　○顓臾、國名、伏羲の後で魯の附庸國となる○有事、戰伐の事○東蒙王、東蒙は山の名○夫子、季孫氏○周任、古の良史家○陳力就列、力を布べ位につく○相輔○兕、野牛○押、猛獸を入れる檻○龜、卜に用ひる龜の甲○櫝、匱○費、季氏の私有○舍、さしおく○辭、口實○文德、禮樂○分崩離析、人民がくづれ分れ離れ〳〵になること○蕭牆、屛。

【義辨】　季氏が顓臾を討たうとした時、季氏に仕へて居つた冉有季路の兩人が孔子に見えてその事を告げた。すると孔子は、「求よそれは汝の考へちがひではないか、顓臾は昔我が先王が東蒙山の主に封じた國で、小國ながら魯の領分內にあつて且つ國家の大切な臣であるから、伐つ理由がないではないか」と。冉有曰く「この事は私達二人は欲しなかつたけれども主人の命であるから是非もありません」と。孔子曰く「古の良史家の周任といふ人の言に力の限りをのべその職責をつくして君がその言を聽かなければ退くがよい。危險なのを支持せず、顚倒しても扶け起さなければ輔佐たる役が務まらぬといはれた。爾等は何故之を諫めないのか、若し諫めてきかれなければ去るがよいではないか。且つ又爾の言は過つてゐる。虎や野牛のやうな猛獸が檻から逃げ出し、龜玉のやうな寶物が匱の中でわれてゐたら、それは誰の罪であるか、いふまでもなく預つてゐる者の罪である。而して爾は主人を輔佐する任務にありながら主人の過

を匡正し得ないのは何故であるか。」すると冉有が辯解して「顓臾は城郭が堅固で且つ季氏の邑の費に近いから、今取らないと後になつて憂の種となるから」といつた。そこで孔子は「君子は卒直に之が欲しいといはないでいろ〳〵の口實を設けて望を遂げようとする者を惡むのである。又私の聞いた所では、諸侯となつて國を有し、卿となつて家を有する者は、土地人民の少いことを心配しないで政治の均しく行き屆かないことを憂へる。又府庫の乏しいことは掛念しないで、人民の安堵如何を氣遣ふ。蓋し思ふに、政治が公平なれば貧しい者はなくなり、上下和すれば府庫の乏しいといふことはなく、人民が安心して居れば國家の傾覆することはない。故に遠國の人が歸服しなければ、禮樂を修めて之を招致し、之を安心させるとこれが邦家を有つ者の道である。然るに今由と求とは季氏を助けて遠人を招致することも出來ず、かへつて國内が崩れ分れるやうな兆をあらはし、しかも戰を國内に起さうと謀つてゐる。思ふに季氏の憂患とする所は外の顓臾ではなくて、極めて手近き垣根の内にあるであらうと戒められた。

孔子曰、天下有道、則禮樂征伐自天子出、天下無道、則禮樂征伐自諸侯出、自諸侯出、蓋十世希不失矣、自大夫出、五世希不失矣、陪臣執國命、三世希不失矣。天下有道、則政不在大夫、天下有道、則庶人不議。

【讀方】　孔子曰く、天下道あれば、則ち禮樂征伐天子より出づ、天下道なければ、則ち禮樂征伐諸侯より出づ、諸侯より出づれば、蓋し十世にして失はざるは希なり、大夫より出づれば五世にして失はざること希なり、陪臣國命を執る三世にして失はざること希なり。天下道あれば、則ち政大夫にあらず、天下道あれば、則ち庶人議らず。

【字義】　○希、稀、少いこと○陪臣、又家來、ここでは大夫の臣をさす○國命、國政○庶人、位なき人民。

【義解】　孔子曰く「天下に道の行はれる時は、禮樂を制定し、不服の土地を征伐す

る大權は天子から出るものであるが、道が廢れるとその大權が諸侯に移る。しかしその諸侯も相傳へて十代までにその政權を失はない者は稀である。而して此の權力が大夫に移ると五世にしてその家は衰へ、更にその臣の手に移ると三世にして衰へないものは少い。天下に道があれば政權は大夫の手にはなく、又位なき庶人は政事を私議する必要はないのである。」と。

孔子曰、祿之去公室五世矣、政逮於大夫四世矣、故夫三桓之子孫微矣。

【讀方】孔子曰く、祿の公室を去ること五世、政大夫に逮ぶこと四世、故に夫の三桓の子孫微なり。

【字義】○祿、天祿○逮、及ぶ○三桓、季孫、叔孫、仲孫○微、衰微。

【義解】孔子曰く「天命が魯の公室を去ること五世（宣公、成公、襄公、昭公、定公）政事の權が大夫に移るに及んで四世（季文子、季武子、季平子、季桓子）となつたが、三桓の家も衰へて遂に家臣の陽虎が權力を專らにするに至つた。と前章の證據をここに述べられた。

孔子曰、益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益矣。友便辟、友善柔、友便佞、損矣。

【讀方】孔子曰く、益者三友、損者三友、直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり、便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり。

【字義】○諒、信實なこと○多聞、學識の廣い人○便辟、威儀巧みに立廻りの巧みな人○善柔、眼の前が上手で從つて陰で譏る人○便佞、口まへのうまい人。

【義解】孔子曰く「ためになる友が三、損になる友が三ある。正直、信實、博識を友とするは益、外飾を事とし立廻りのよき人、柔順にしてよく迎合する人、辯口巧みに實なき人を友とするは損である。

孔子曰、益者三樂、損者三樂、樂節禮樂、樂道人之善、樂多賢友、益矣、樂驕樂、樂佚遊、樂宴樂、損也。

【讀方】孔子曰く、益者三樂、損者三樂、禮樂を節するを樂み、人の善を道ふを樂

しみ、賢友多きを樂しむは益なり。驕樂を樂しみ、佚遊を樂しみ、宴樂を樂しむは損なり。

【字義】○樂、心に愛し好む○節禮樂、禮樂を程よくする○道、言ふ○驕樂奢貴を恃んで奢侈をする○佚樂、氣儘な遊○宴樂、酒色の遊

【義解】孔子曰く、人の好樂に損益二類がある。禮樂を程よくすることを樂しみ、人の善行を吹聽することを樂しみ、よい友達のあることを樂しむのは樂しんで益のあるものである。之に反して奢侈を樂しみ、氣儘放縱な遊を樂しみ、酒色に荒むを樂しむのは、樂しんで害のあるものである。

【讀方】孔子曰、侍於君子、有三愆、言未及之而言、謂之躁、言及之而不言、謂之隱、未見顏色而謂之瞽。

【讀方】孔子曰く、君子に侍するに三愆あり、言未だ之れに及ばずして言ふは之を躁といふ、言之に及んで而して言はざるは、之を隱と謂ふ、未だ顏色を見ずして而して言ふは、之を瞽といふ。

【字義】○君子、德と位とを有する人○三愆、三つの過ち○躁、輕忽、アハテル○隱、隱蔽、カクス○瞽、目の見えぬこと。

【義解】孔子曰く「君子の側に侍するに應待の仕方に三の過失がある。一は君子の言が自分の及ばないのに輕忽に發言することでそれを躁といひ、二は君子の言葉が自分に及んだ時、卽ち言ふべき時に言はないのは隱といひ、三は君子の顏色を見ないで恣まゝに言ふを瞽といふ。躁は無禮、隱は時を失し、瞽は昧く、共に注意すべきことである。」と。

【讀方】孔子曰、君子有三戒、少之時、血氣未定、戒之在色、及其壯也、血氣方剛、戒之在鬪、及其老也、血氣既衰、戒之在得。

【讀方】孔子曰く、君子に三つの戒あり、少時は血氣未だ定まらず、之を戒むる色にあり、其の壯なるに及んで、血氣方に剛し、之を戒むる鬪ひにあり、其の老に及

んで、血氣既に衰ふ、之を戒むる得るにあり。

【字義】○少之時、三十以前○壯、三十以後○老、五十以上○得、得るを貪る。

【義解】孔子曰く「君子に三つの戒慎すべきことがある。年若き時は血氣定まらず情に動き易いので、此の時は女色を愼まねばならぬ。壯年に至つては血氣強く雄心勃々たる時であるから人と爭ふことが多いから、その人と衝突することを戒めねばならぬ。老年に及んでは血氣が衰へるかはりに物質欲が强くなる。故に之を戒しめるには貪らぬやうに注意するがよい。この色と爭と慾の三をその時代によつて戒慎すべきである」と。

孔子曰、君子有三畏。畏天命、畏大人、畏聖人之言。小人不知天命、而不畏也、狎大人、侮聖人之言。

【讀方】孔子曰く、君子に三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れず、大人に狎れ、聖人の言を侮る。

【字義】○天命、天理○大人、長者有德の人○狎、尊敬をかく。

【義解】君子に三つの畏れ愼しむべきことがある。一は天命、二は有德の人、三は聖人の言である。然るに小人は天命の尊嚴、神妙にして測り知るべからざる如くにしてしかも必ず冥々の內にあらはれることを知らないから敢て恐れもせず、忌憚なき行動をしてゐる。又有德の君子に狎れ親しんで敬せず、聖人の教訓も侮つて之を耳にも入れない。

孔子曰、生而知之者、上也、學而知之者、次也、困而學之、又其次也、困而不學、民斯爲下矣。

【讀方】孔子曰く、生れながらにして之を知る者は上なり、學んで之を知る者は、次なり、困みて之を學ぶは、又其の次ぎなり、困んで學ばず、民斯を下と爲す。

【字義】○困、苦しみ困難する。

【義解】孔子曰く「人は天賦同じくないから、幾通りにか分れる。第一は生れなが

らにして道を知る者で上の人品である。次は學んで道理を辨へる者で第二位である。次は始め學問をしないで、事に當つて大いに困厄してこれではならぬと奮發して學に志す者で第三位である。次は物事に當つて常に疑滯して大いに困りながら、しかも終身學に志さないもので下の部である。

孔子曰、君子有九思、視思明、聽思聰、色思溫、貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義。

【讀方】　孔子曰く、君子に九思あり、視るには明を思ひ、聽くには聰を思ひ、色には溫を思ひ、貌には恭を思ひ、言には忠を思ひ、事には敬を思ひ、疑はしきには問はんと思ひ、忿りには難を思ひ、得るを見ては義を思ふと。

【字義】　○思、思慮すること○色、顏色○貌、總身の態度。

【義解】　孔子曰く「君子には九つの思慮がある。視るには明か、聽くにはさとく、顏色は溫和に容貌態度は恭しく、言葉はまこと、事を行ふには敬愼を旨とし、疑問には

あへば解決を思ひ、忿り腹立つ時は後の禍難を思ひ、利益を得る場合には義理に外れてゐるかどうかを思ふ。」

孔子曰、見善如不及、見不善、如探湯、吾見其人矣、吾聞其語矣。隱居以求其志、行義以達其道、吾聞其語矣、未見其人也。

【讀方】　孔子曰く、善を見ては及ばざるが如く、不善を見ては湯を探るが如し、吾れ其人を見る、吾其の語を聞く。隱居して其の志を求め、義を行ひて以て其の道に達す、吾れ其の語を聞けり、吾れ未だ其の人を見ざるなり。

【字義】　○如不及、にげるのをおひかけるやうにする○如探湯、手を熱湯に入れるのを避けるやうにする○求其志、其志せる先王の道を求める　其語、古語。

【義解】　孔子曰く「善を見ては之を速に行はんとし、不善を見ては避けてしないやうに努めるとは私は現在にかくの如き篤志の人を見、又古の話にも聞いてゐる。道の行はれない時に當つて隱れて家に居り、其の志す仁義の道を學び求め、志を得ては義

を行つて仁義の道を天下に行きわたらせるといふことは古語には聞いてゐるが、現在そのやうな人を見ないのである。」

齊景公有馬千駟、死之日、民無徳而稱焉。伯夷叔齊餓于首陽之下、民到于今稱。其斯之謂與。

【讀方】齊の景公馬千駟あり、死するの日、民徳として稱するものなし。伯夷叔齊は首陽之下に餓す、民今に到るまで稱す。其れ斯れ之を謂ふか。

【字義】○駟、馬四匹○首陽、山の名○其斯之謂與、此の句の上に顔淵第十二篇の、「誠に富を以てせず亦祇に異を以てす」の句が入るべきである。

【義解】齊の景公は馬四千匹も持つた大國の君で富貴を極めたがその死するに及んでは民がその徳をいふ者がない。之に反して伯夷叔齊は食を得ることが出來なくて首陽山の下で餓死したが、民は今に到るまでも其の徳を稱してやまない。之を以て見るに詩經に後世に名を殘すことは富を以てしない唯人に異る徳がある爲であるといつてゐるが、恐らくはこの景公と伯夷叔齊の例の如きであらう」

陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎。對曰、未也、不學詩、無以言、鯉退而學詩。他日又獨立、鯉趨而過庭、曰、學詩乎。對曰、未也、不學禮、無以立、鯉退而學禮、聞斯二者。陳亢退而喜曰、問一得三、聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也。

【讀方】陳亢伯魚に問うて曰く、子も亦た異聞あるか。對へて曰く、未し、嘗て獨り立つ、鯉趨りて庭を過ぐ、曰く詩を學びたりや、對へて曰く、未だし、詩を學ばずんば以て言ふことなし。鯉退いて詩を學ぶ。他日又た獨り立つ、鯉趨りて庭を過ぐ、曰く禮を學びたりや、對へて曰く、未だし、禮を學ばずば以て立つことなし。鯉退いて禮を學ぶ、斯の二者をきく。陳亢退いて喜んで曰く、一を問うて三を得たり、詩を聞き、禮を聞き、又君子の其の子を遠ざくるを聞く。

【字義】○陳亢、孔子の門人子禽の姓名○伯魚、孔子の子、字は鯉○異聞、格別の

教訓○獨立、孔子が堂の上に獨り立つてゐた○趨、尊長の前を過ぎる時は趨るが禮である。

【義解】弟子の陳亢が孔子の子の伯魚に問うて曰く「御身は何か人と異つた教訓を聞かれたか」と。鯉曰く「別に異つた教も聞かない。或日父上が堂上に獨り立つて居られたからその前を趨りすぎると、詩を學んだかとおつしやつたので、まだですと答へると、詩を學ばなければ、人と共に談ずることは出來ないとおつしやつた。それで私は退いて詩を學んだ。他日又その前を過ぎると今度は禮を學んだかと尋ねられたから、まだですと對へると、禮を學ばなければ君子の中に於て身を立てることが出來ないとおつしやつたから、私は退いて禮を學んだ。聞いた所は此の二つだけです」と對へた。陳亢は大そう喜んで「一つだけきいて三のよい答を得た。詩と禮と君子がその子を狎れ近づけさせないといふ教育法の三を知ることが出來た」といつた。

邦君之妻、君稱之曰夫人、夫人自稱曰小童、邦人稱之曰君夫人、稱諸異邦、曰寡小君、異邦人稱之、亦曰君夫人。

【讀方】邦君の妻は、君之を稱して夫人と曰ふ、夫人自ら稱して小童（せうとう）といふ、邦人之を稱して君夫人（くんふじん）といふ、諸（これ）を異邦に稱して寡小君（くわせうくん）と曰ひ、異邦の人之を稱して亦た君夫人と曰ふ。

【字義】○邦君、諸侯○小童、子供のこと、夫に對して謙遜していふ言葉○稱諸異邦、その國の臣民より他國の臣民に向つていふ。

【義解】諸侯の妻は、君自らは夫人と稱し夫人自らは小童といひ、自國の人は君夫人、異邦人に對しては寡小君といひ、異邦人は君夫人といふ慣例である。

陽貨第十七

此篇すべて二十六章。

陽貨欲見孔子、孔子不見、歸孔子豚、孔子時其亡、而往拜之、遇諸塗。謂孔子曰、

來予與爾言、曰、懷其寶而迷其邦、可謂仁乎。曰、不可。好從事而亟失時。可謂知乎。曰、不可。日月逝矣、歲不我與。孔子曰、諾、吾將仕矣。

【讀方】　陽貨孔子を見んと欲す、孔子見ず、孔子に豚を歸る、孔子其の亡きを時として、而して往いて之を拜す、諸に塗に遇ふ。孔子に謂つて曰く、來れ予爾と言はん、曰く、其の寶を懷いて其の邦を迷はすは仁と謂ふべきや。曰く、不可なり。事に從ふことを好んで亟時を失ふは、知と謂ふべきや。曰く、不可なり。日月逝く、歲我と與ならず。孔子曰く、諾、吾れ將に仕へんとす。

【字義】　○陽貨、季氏の家臣、名は虎、陪臣でありながら國政を專にした○歸、贈る○時其亡、其不在をよい機として○塗、途中○亟、しば〳〵○日月逝矣歲不我與、月日が早く立つて我と時とは一所に居らない。

【義解】　權臣陽虎が孔子をして來り見えさせようとしたが、孔子は應じなかつた。それで陽虎は豚を贈つて是非とも自分の家に來させようとした。孔子は其の意を知つてわざと其の留守を擇らんで往つて拜した。然るに途中で出會つたので、陽虎の曰く來れ汝と大いに語らうと。そして曰ふには「邦を治め天下を安んずる學德を懷きながら民の迷ひを救ふともしないのは仁といふことが出來るか。」と、孔子は仁といふ能はずと答へた。次に又「然らば世事に關係することを欲しながら仕へる時機を度々失ふのは知者といふことが出來るか」と。孔子は「知者といふことが出來ない」と答へられた。そこで更に「日月は暫くもやまず過ぎて老年は近づいて行く、躊躇すべき時であらうか」と。孔子は「宜しい、私は之から仕へませう」といはれた。蓋し陽貨の如き惡人に逆つてもしかたがないので體よく答へられたのである。

子曰、性相近、習相遠也。

【讀方】　子曰く、性相近く、習相遠し。

【義解】　孔子曰く、「人の天稟の性は大抵似よつたもので甚だしい懸隔はないものだが、教育習慣の力によつて天地も雷ならぬ差別を生ずるものである」

子曰、唯上知與下愚不移。

【讀方】　子曰く、唯上知と下愚は移らず。

【義解】　孔子曰く「人は教育慣習によつて善にも惡にも移る者であるが、唯上知に生れついたものは惡に染まず、下愚に生れついた者は善に進むことが出來ないだけである」

子之武城聞絃歌之聲。夫子莞爾而笑曰、割鷄焉用牛刀。子游對曰、昔者偃也聞諸夫子、曰、君子學道則愛人、小人學道則易使也。子曰、二三子、偃之言是也、前言戲之耳。

【讀方】　子武城に之いて絃歌の聲を聞く。夫子莞爾として笑つて曰く、鷄を割くに焉んぞ牛刀を用ひん。子游對へて曰く、昔し偃之を夫子に聞けり、曰く、君子道を學べば則ち人を愛し、小人道を學べば則ち使ひ易しと。子曰く、二三子よ偃の言是なり前の言は戲るるのみ。

【字義】　○之、ゆく○武城、魯の邑で子游の支配した地○莞爾、につこり笑ふ○牛刀、牛を割く大刀○君子小人、こゝのは位についていふ○道、禮樂のこと。

【義解】　孔子が子游の宰地たる武城に往かれた時に、琴を彈き歌を吟ずるの聲を聞いた。孔子がニッコリ笑つて「鷄を割くのに牛刀を用ひるのは仰山だね」といつた。蓋し禮樂は千乘の國を治める大道で小邑を治めるには過分であるとの意であつた。この時子游曰く、「前に私の聞いた先生のお話に、「身分の高い君子が禮樂を學べば人を愛し、身分のない小人が道を學べば使役し易い」と。そこで孔子は伴はれた門弟を顧みて「偃の申すことは尤もである。私の先程の言は戲れにいつたのである」とおつしやつた。

公山弗擾以費畔、召、子欲往、子路不說曰、末之也已、何必公山氏之也、子曰、夫召我者而豈徒哉、如有用我者、吾其爲東周乎。

【讀方】　公山弗擾費を以て畔く、召ぶ、子往かんと欲す。子路說ばずして曰く、之末

きのみ、何ぞ必ずしも公山氏に之れ之かん。子曰く、夫れ我を召ぶ者豈徒ならんや、如し我を用ひる者あらば、吾れ其れ東周を爲さん。

【字義】○公山弗擾、公山は姓、弗擾は名、季氏の領地の費といふ邑の宰○召、よぶ招く○末、無し○豈徒哉、たゞ空しく吾を招くのではなからう○東周、周道を東方に興す。

【義解】公山弗擾が費に立籠つて季氏に叛いた。そして孔子を招いたから孔子は招に應じようとすると、子路が喜ばないで「行く所がないではないし、選り好んで不臣の公山氏の所へ行く必要はないでせう」といさめた。すると孔子の曰く「我を招く者はたゞ空しく招くのではなく我を用ひ我道を行はんとする考があるからであらう。若し我を用ひる者があれば、我は今日衰へてゐる周の文武の道をこの魯國に興して人民を安んじよう」といはれた。蓋し孔子の道を行はんとするに切なることを示したものである。

子張問仁於孔子。孔子曰、能行五者於天下爲仁矣。請問之。曰、恭寬信敏惠、恭則不侮、寬則得衆、信則人任焉、敏則有功、惠則足以使人。

【讀方】子張仁を孔子に問ふ。孔子曰く、能く五者を天下に行ふを仁となす。之を請ひ問ふ。曰く、恭、寬、信、敏、惠、恭なれば則ち侮らず、寬なれば則ち衆を得、信なれば則ち人任ず、敏なれば則ち功あり、惠なれば則ち以て人を使ふに足る。

【義解】子張仁を孔子に問うた。孔子曰く、能く五つの事を天下に行へば仁といふことが出來ると。子張が更にその五の内容を尋ねると、答へて曰く「恭と寬と信と敏と惠である。自ら恭敬にして人に接すれば人が侮らない。心寬く人を容るれば衆くの人の人望を得、信實にして言行が一致すれば人が我を信任する。又物事を行ふに敏にして怠らなければ成功疑ひなく、恩惠を施せば衆人之に服して使ひ易い」

佛肸召。子欲往。子路曰、昔由也聞諸夫子、曰、親於其身爲不善者、君子不入也、佛肸以中牟畔、子之往也如之何。子曰然有是言也、不曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、

涅而不緇、吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食。

【讀方】佛肸召ぶ。子往かんと欲す。子路曰く、昔には由や諸を夫子に聞く、曰く、其の身に於て不善をなす者には君子は入らざるなり、佛肸中牟を以て畔く、子の往く之を如何。子曰く、然り、是の言あり、堅きを曰はずや、磨いで磷がず、白きを曰はずや、涅めて緇まず。吾豈匏瓜ならんや、焉んぞ能く繫りて食はれざらん。

【字義】○佛肸、晉の大夫趙氏の邑、中牟の代官○磨而不磷、砥石にかけて磨いでも薄くならぬ○涅而不緇、黒く染めても黒くならぬ○匏瓜、ひさごの一種で苦くて食へぬもの。

【義解】晉の趙氏の叛臣佛肸が孔子を招いたから孔子は往かうした。その時子路諫めて曰ふに「私はきに夫子に聞いたが、親ら不善を爲す者の地には君子は入らないといふ。然るに佛肸は中牟によつて反したのに夫子の往かれるのはどういふ譯ですか」と。孔子曰く「汝の引用した言は私が嘗つて言つたことはある。然しながら至つて堅きものは磨いでも薄くならず、至つて白いものは黒土でそめても決して黒色に染まらないといふことがある。私は堅にして白きを自信する者何ぞ佛肸のためにけがされよう。且つ私は匏瓜の如く苦くて人にも食べられないやうな無用のものではない。繫つて人に食はれるもの即ち用ひられて治國濟民の業を果したいものである。故に何人でも用ひるとならば喜んで仕へよう」

子曰、由也、女聞六言六蔽矣乎。對曰、未也。居吾語女。好仁不好學、其蔽也愚、好知不好學、其蔽也蕩、好信不好學、其蔽也賊、好直不好學、其蔽也絞、好勇不好學、其蔽也狂。

【讀方】子曰く、由や女六言の六蔽を聞けりや。對へて曰く未だし。居れ吾れ女に語らん。仁を好みて學を好まざれば、其の蔽や愚、知を好んで學を好まざれば、其の蔽や蕩、信を好んで學を好まざれば、其の蔽や賊、直を好んで學を好まざれば、其の蔽や絞、勇を好んで學を好まざれば、其の蔽や亂、剛を好んで學を好まざれば、其の蔽

や狂なり。

【字義】○六言六蔽、六つのよい言葉の上に六つの弊害あること○愚、物の輕重を知らぬこと○蕩、高遠にはせて實行にうときこと○賊、人を害ふ○絞、人をせむるに急なこと○亂、理に逆ふこと○狂、我儘にして輕擧妄動すること。

【義解】孔子が子路に「由よ、汝は美なる六言にも各〻六つの弊害のあることを知つてゐるか」と尋ねると子路は存じませんと對へたから、孔子は「坐せよ、私れ汝にそのことを話さう。仁を好むはよい事だが學を好まないと、愛が過厚になつて物の輕重がわからないで愚の弊に陷る。知を好んでも學を好まなければ其の弊は高遠にはせて實行をおろそかにし、信實を好まなければ小信を固執して人を傷害する弊に陷り、直を好んでも學を以て之を制しなければ其の蔽は亂となつて人道に逆ひ、剛を好むも學を以てしなければ輕擧妄動に陷る。六言の美も學を好まなければ心づかない弊に陷るのである」と。

子曰、小子何莫夫詩、詩可以興、可以觀、可以群、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名。

【讀方】子曰く、小子何ぞ夫の詩を學ぶなきや、詩は以て興るべく、以て觀るべく、以て群すべく、以て怨むべし、之を邇くしては父に事へ、之を遠くしては君に事ふ、多く鳥獸草木の名を識る。

【字義】○小子、弟子を指す、○興、發奮興起○觀、治亂をみる○群、衆と交はつて和樂する○怨、怨んで怒らず獨り慰める○邇、近く○識、知る。

【義解】孔子曰く、吾が諸弟子よ、なぜ詩を學ばないのか、抑〻詩は之を讀めば己が志氣を興起せしめ、世の治亂政治の得失を觀、人と群交して和暢し、怨んで怒らず以て自ら慰め、之を近くしては父に事ふるの道、之を遠くしては君に事ふるの道を會得し、且つ鳥獸草木の知識を得るの益がある」

子謂伯魚曰、女爲周南召南矣乎、人而不爲周南召南、其猶正牆面而立也與。

【讀方】子、伯魚に謂つて曰く、女周召南を爲びたりや、人にして、周南召南を爲ばされば、其れ猶ほ正しく牆に面して立つが如きか。

【字義】○爲、學ぶ○周南召南、詩經の首篇、修身齊家を詠じてゐる○正牆面而立、眞向きに垣根に向つて立つ。

【義解】孔子が其の子の伯魚に謂ふには「汝は詩の周南召南を學んだか、若し人にして此の周南召南を學ばなければ、恰も垣根に面して立つやうなもので、一歩も歩くことが出來ないと同じやうに、身を修め家を整へ更に治國平天下の要道を知ることが出來ない。

子曰、禮云禮云、玉帛云乎哉、樂云樂云、鐘鼓云乎哉。

【讀方】子曰く、禮と云ひ、禮と云ふ、玉帛をいはんや、樂と云ひ樂といふ、鐘鼓を云はんや。

【字義】○玉帛、五玉三帛といつて禮を行ふ道具○鐘鼓、禮を行ふ時の樂器。

【義解】孔子曰く「禮樂は君子の最も重んずべき所であるが禮とへば金銀玉帛を捧げる末節に流れ、樂といへば絲竹鐘鼓を奏することのみ思ふは、本來を忘れたもので、禮の本は敬、樂の本は和であつて、決して玉帛鐘鼓の末ではない。

子曰、色厲而內荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與。

【讀方】子曰く、色厲しくして內荏なるは、者を小人に譬ふ、其れ猶ほ穿窬の盜の如きか。

【字義】○色厲、顏色のおごそかなこと○內荏、內心柔弱○小人、細民○穿窬之盜、穿は壁をうがち、窬は垣をこえる、こそ〳〵泥棒。

【義解】孔子曰く「外壁だけ威嚴を裝つて君子らしくしても內心に確然として守る所なく柔弱なれば、甚だ卑しむべきで、之を細民に譬へれば、壁を穿ち垣を踰えてひそかに物を奪ふ窮盜に似て、其の內面を看破されることを恐れてゐる」

子曰、鄕原、德之賊也。

【讀方】子曰く、鄕原は德の賊なり。

【字義】○鄕原、無學にして世に媚び一鄕の人に有德者といはれる虛名家。

【義解】孔子曰く「無學にして流俗に媚び虛名を一鄕に博して謹厚の名を得る者は、かへつて德を賊する橫看物である」

子曰、道聽而塗說、德之棄也。

【讀方】子曰く、道に聽いて塗に說くは、德を之れ棄つるなり。

【字義】○道、道路○塗、道路。

【義解】孔子曰く「善言を聞いたならば心をひそめて玩味し以て己が有とすべきであるのに、道に聽いて直ちに塗に說けば耳から口へ出すだけの口耳四寸の學で、かくの如きはかへつて德を棄つるものである」

子曰、鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之患失之、苟患失之、無所

不至矣。

【讀方】子曰く、鄙夫は與に君に事ふべけんや、其の未だ之を得ざるや、之を得んことを患ふ、既に之を得れば、之を失はんことを患ふ、苟くも之を失ふを患ふ、至らざる所なし。

【字義】○鄙夫、卑劣の輩○無所不至、如何なることでも敢てなさないことはない。

【義解】孔子曰く「志の卑劣にして富貴に汲々たる輩は、共に君に事へることは出來ない。その譯は未だ富貴爵祿を得ない時には、之を得ることに腐心し、一旦之を得るに至れば如何なる計を講じても之を失はない工夫をする。苟くも之を失ふことを恐れるから、富貴を維持し、權勢を保つためには、如何なる手段も之を選ぶの暇はない、父を殺し君を殺するの大罪も敢て之をなすのである。故に道に志す君子の共に立つべきものではない」

子曰、古者民有三疾、今也或是之亡也、古之狂也肆、今之狂也蕩、古之矜也廉、今

之矜也忿戾、古之愚也直、今之愚也詐而已矣。

【讀方】　子曰く、古は民に三疾あり、今や或は是れなし、古の狂や肆、今の狂や蕩、古の矜や廉、今の矜や忿戾、古の愚や直、今の愚や詐のみ。

【字義】　○疾、瑕疾、くせ○亡、無し○狂、志の高遠にして進取の氣に富む○肆、小節に拘はらない○蕩、放縱○矜、身持ちの嚴格なこと○廉、稜角あること○忿戾、暴戾忿恚爭を好む○直、直情徑行。

【義解】　孔子曰く「古は民に三つの癖があつたが、今はその癖さへも亡失してしまつた。古の三疾とは狂、矜、愚であるが、之を今と比較するに、古の狂者は志高きために、小節に拘はらなかつたが、今の狂者は放縱にして禮をかへりみない。古の矜者は自ら持すること嚴格で、稜角があつて親しみ難かつたが今の矜者は暴戾忿恚人と爭ふことを好む。古の愚者は義理に明かでないために直情徑行するばかりであつたが、今の愚者は私意を挾み詐妄をなして自ら詐はるのである」

子曰、巧言令色、鮮矣仁。

學而篇を見よ。

子曰、惡紫之奪朱也、惡鄭聲之亂雅樂也、惡利口之覆邦家者。

【讀方】　子曰く、紫の朱を奪ふを惡む、鄭聲の雅樂を亂すを惡む、利口の邦家を覆すを惡む」

【字義】　○紫、間色○朱、正色○雅樂、正しい音樂○利口、口まめに物をいふ。

【義解】　孔子曰く「貴人の服は正色の朱を用ふべきであるのに間色の紫が色の美しい爲めに正色を奪つて服色に用ひられるやうになつたのを惡む。又淫靡な鄭の音樂が行はれて正しい音樂を亂すことを惡む。次に辯舌巧みにして正理を亂し邦家を傾け覆す者を惡む」

子曰、予欲無言。子貢曰、子如不言、則小子何述焉。子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉。

【讀方】子曰く、予言ふこと無からんと欲す。子貢曰く、子如し言はざれば則ち小子何をか述べん。子曰く、天何をか言ふ、四時行はれ、百物生ず、天何をか言はんや。

【字義】○小子、私ども。

【義解】孔子嘆じて曰く「口の先きの言は益が少ないから今後物を言はないでおよう」と。子貢が之を聞いて「如し夫子が物を言はなければ、我々は後世に何をか述べ傳へませう」と。孔子曰く「天は何を曰ふか、天は無言で一遍も物を言はないけれども四時循行し百物發生して宇宙の妙理が行はれてゐる。德を行ふ者は一動一靜皆天理であつて、敢て物を言はなくとも教を述べることが出來る」

孺悲欲見孔子。孔子辭以疾。將命者出戸、取瑟而歌、使之聞之。

【讀方】孺悲孔子に見えんと欲す。孔子辭するに疾を以てす。命を將ふ者戸を出づ、瑟を取つて歌ふ、之をして之に聞かしむ。

【字義】○孺悲、魯の人○將命者、主人の命を取次ぐ者。

【義解】魯の人孺悲が曾つて罪を孔子に得た。或時來つて孔子に見えようとしたが、孔子は病氣と稱してあはなかつた。そして取次者が戸を出た頃孔子は瑟を取つて之を鳴らし孺悲をして之を聞かせて、疾あるにあらず罪あるために接見を許さないとの意を悟らせた。

宰我問、三年之喪期已久矣、君子三年不爲禮、禮必壞、三年不爲樂、樂必崩、舊穀既沒、新穀既升、鑽燧改火、期可已矣。子曰、食夫稻、衣夫錦、於女安乎、曰安。女安則爲之、夫君子之居喪、食旨不甘、聞樂不樂、居所不安、故不爲也、今女安則爲之。宰我出、子曰、予之不仁也、子生三年、然後免於父母之懷、夫三年之喪、天下之通喪也、予也有三年之愛於其父母乎。

【讀方】宰我問ふ、三年の喪期已に久し、君子三年禮を爲さざれば、禮必ず壞れん、三年樂を爲さざれば、樂必ず崩れん、舊穀既に沒き、新穀既に升る、燧を鑽りて火を改む、期にして已むべし。子曰く、夫の稻を食し、夫の錦を衣る、女に於て安きか。

曰く安し。女安くば則ち之を爲せ、夫れ君子の喪に居る、旨さを食して甘からず、樂を聞いて樂しからず、居所安からず、故に爲さざるなり、今女安くば則ち之を爲せ。宰我出づ、子曰く、予の不仁なる、子生れて三年、然して後に父母の懷を免る、夫れ三年の喪は天下の通喪なり、予也三年の愛を其の父母に有するか。

【字義】○期已久矣、期は一年、一年でも長すぎる○君子、人君○沒、盡く○升、熟する○鑽燧改火、燧は火を取る木、鑽は穿つ、一年にして火をとる木を改める。

【義解】宰我が問うて曰く、三年の喪は期年でも長い感がする。此の間、君たる人が禮樂を廢して居れば禮樂は崩れ壞れるであらう。故に舊穀なくなつて新穀がのぼり燧木を改める一年を以て已めたらよからう」と。孔子曰く「汝は父母の喪中で米食し錦衣して心に安いか」と宰我は少しも不安はないと對へたので、「汝に不安がなければ汝の思ふ通り行へ、君子の三年の喪にあるのは强いて之をするのではく、美食しても甘からず、音樂を聞いても樂しからず、高堂に居つても面白くないからしないのである。しかし汝は心安くば獨り自ら行へ」と。宰我が退出すると孔子は「宰予といふ男は不仁の男かな、子供が生れて三年の間は父母の懷に抱かれてゐるのだから、父母がなくなつて三年の喪をするのは天下の喪の通法である。然るに彼は一年に短縮して他は美衣美食しようとするのは、宰予には三年の父母の愛撫を受けなかつたであらうか」と。

子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博弈者乎、爲之猶賢乎已。

【讀方】子曰く、飽食終日、心を用ふる所無し、難きかな。博弈なる者あらずや、之を爲すは猶ほ已むに賢る。

【字義】○博弈、圍碁將碁の類○賢乎已、已は止む、何もしないよりかまさつてゐる。

【義解】孔子曰く「人が徒らに飽食するのみにて無爲に日を暮らして心力を學問事業にも用ひることがなければ、閑居不善を爲すで禍を免かれることが難いであらう。

彼の閨碁將碁のやうな戯事でも之を爲すは、無爲無心で暮らすよりもましである」

子路曰、君子尙勇乎。子曰、君子義以爲上、君子有勇而無義爲亂、小人有勇而無義爲盜。

【讀方】子路曰く、君子勇を尙ぶか。子曰く、君子義を以て上と爲す、君子にして勇ありて義なれば亂を爲す、小人勇ありて義なければ盜をなす。

【字義】○尙、貴ぶ○君子小人、位を以ていふ。

【義解】子路が曰ふに「君子は勇を貴びますか」と。孔子曰く「君子の最も貴ぶ所は義である。故に君子にして勇はあつても義がなければ亂をなし、小人勇あつて義なければ盜みをするに至るであらう」と。蓋し子路の勇にはやるの癖を押へたものであらう。

子貢曰、君子亦有惡乎。子曰、有惡、惡稱人之惡者、惡居下流而訕上者、惡勇而無禮者、惡果敢而窒者。曰、賜也亦有惡乎。惡徼以爲知者、惡不孫以爲勇者、惡訐以爲直者。

【讀方】子貢曰く、君子も亦惡むことあるか。子曰く惡むことあり、人の惡を稱する者を惡み、下流に居つて上を訕る者を惡み、勇にして禮なき者を惡み、果敢にして窒ぐ者を惡む。曰く賜や亦惡むことありや。徼へて以て知となす者を惡み、不孫にして以て勇を爲す者を惡み、訐いて以て直となす者を惡む。

【字義】○居下流而訕上、人臣となりて君上の過を諫めないで誹謗する○果敢而窒者、獨斷にして人の說を容れない者○徼以爲知者、人の心情に連命して知者ぶる者○不孫、孫は遜、傲慢○訐以爲直、人の秘密を摘發して自分を正しいとする者。

【義解】子貢が問うて曰く「人を愛する筈の君子も人を惡むことがありますか」と。孔子は答へて「人の惡事を吹聽することを好む者、下位に居つて上位の者を誹謗する者、血氣の勇にまかせて禮儀をなみする者、我意を張つて人を容れることの出來ない者を惡む」といはれて、更に「賜や汝も惡むことがあるか」と尋ねられた。そこで子貢は

人の情意に迎合して知となす者、傲慢にして勇者なりとする者、人の秘密を許いて直となす者を惡みますと」對へた。

子曰、唯女子與小人、爲難養也、近之則不孫、遠之則怨。

【讀方】子曰く、唯女子と小人とは之を養ひ難しとなす、之を近づくれば則ち不孫、之を遠ざくれば則ち怨む。

【義解】孔子曰く「女子と小人とは之を度するに難い。何となれば之を愛し近づくれば之に狎れて畏るる所なく、嚴にすぎて之を遠ざけんとすれば、怨みを懷く。愛と嚴とを適當に用ひなければ之を濟度し難いのである」

子曰、年四十而見惡焉、其終也已。

【讀方】子曰く、年四十にして惡まる、それ終らんのみ。

【義解】孔子曰く「人の年四十となれば德の成就すべき時であるのに、この年に於て猶ほ人に惡まれ、惡事を指摘されるやうでは到底成德の望みはない」

微子第十八

此の篇すべて十二章、多くは聖賢の亂世に於ける出所を記す。

微子去之、箕子爲之奴、比干諫而死。孔子曰、殷有三仁焉。

【讀方】微子は之を去り、箕子は之が奴となり、比干は諫めて死す。孔子曰く、殷に三仁あり。

【字義】○微子、紂の庶兄○箕子比干、紂の伯叔父。

【義解】殷の紂王が暴逆無道なために、微子は諫めたけれども用ひられなかつたから國を去つた。箕子は諫めて囚へられて奴となり詐り狂して辱を受けた。比干は同じく諫めて其の怒に觸れて殺された。孔子が之を評して殷に三人の仁者があるといつたのはこの微子箕子比干のことを指すのである。

柳下惠爲士師、三黜。人曰、子未可以去乎。曰直道而事人、焉往而不三黜、枉道而

事人、何必去父母之邦。

【讀方】柳下惠士師と爲り、三たび黜けらる。人の曰く、子未だ以て去るべからざるか。曰く道を直くして人に事へば、焉に往くとして三たび黜けられざらん、道を枉けて人に事へば、何ぞ必ずしも父母の邦を去らんや。

【字義】○士師、裁判官○黜、退けらる○父母之邦、魯の國をさす。

【義解】魯の大夫柳下惠は裁判官となつて三度退けられたがなほ去らなかつた。或人が諷して曰く「あなたはまだこの邦を去らないのか、三度も退けられたら他邦へ行つて仕へた方がましではないか」と。柳下惠曰く「當今の世は道を直くして事へればどこの國へ行つても二三度の免官は覺悟しなければならぬ、道を枉げて事へる位なら父母の國たる此の魯を去る必要はない」と答へた。

齊景公待孔子曰、若季氏則吾不能、以季孟之間待之。曰、吾老矣、不能用也。孔子行。

【讀方】齊の景公孔子を待ちて曰く、季氏の如きは則ち吾れ能はず、季孟の間を以て之を待たん。曰く吾れ老いたり、用ふる能はず。孔子行る。

【字義】○待、待遇する○季孟之間、季氏魯の上卿、孟氏は下卿、その間の階級待遇○行、去る。

【義解】齊の景公が始め孔子を用ひるつもりで、其の待遇法を相談して曰く、季氏の魯に於けるやうな禮遇は出來ないが季孟の間位の禮遇をしようといつた。然るに他日更に曰く、自分ももう年とつたので孔子を用ひることが出來ないと。孔子は之を聞いて齊を去つた。

齊人歸女樂、季桓子受之、三日不朝。孔子行。

【讀方】齊人女樂を歸る、季桓子之を受け、三日朝せず。孔子行る。

【字義】○女樂、女役者○歸、贈る○季桓子、魯の大夫季孫斯。

【義解】定公が孔子を魯の司寇として相の事を行はせたので隣國の齊は大いに懼れ

て魯の内政を腐敗させるために女音樂者といつたやうなものを八十名贈つた。魯の季桓子はそれを受けて大いに喜び、その淫樂にふけつて朝に出仕しないこと三日に及んだ。孔子は道の行はれないことを知つて手をひいた。

楚狂接輿歌而過孔子曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追已而、已而。今之從政者殆而。孔子下欲與之言、趨而辟之、不得與之言。

【讀方】　楚の狂接輿歌つて孔子を過ぎて曰く、鳳や鳳や、何ぞ德の衰へたる、往く者は諫むべからず、來者は猶ほ追ふべきのみ、今の政に從ふ者は殆し。孔子下りて之と言はんと欲す。趨りて之を辟く、之と言ふことを得ず。

【字義】　○狂接輿、楚の隱者伴つて狂者となつてゐる接輿といふ男○鳳兮、鳳を孔子に比す○殆而、殆は危し、而は、助語。

【義解】　孔子が楚に往かれた時、狂接輿なる隱者が孔子の車前を横ぎつて曰く「鳳よ鳳よ、汝は治世に出でて亂世に隱るべき鳥なのに、今この亂世に生れて性命を全うすることを知らないのは汝の德の衰へたがためか。しかし過去はとがめることが出來ないが將來は猶ほ追ふことが出來るから、已めよ已めよ政事に從ふことを。そして世にかくれよ、今の世に政事に從ふものは危害を被り性命を全うすることが出來ないから」といつた。孔子は之をきいてその人と語らうとしたが走りぬけてしまつたので、言葉を換はすことが出來なかつた。

長沮桀溺耦而耕、孔子過之、使子路問津焉。長沮曰、夫執輿者爲誰。子路曰、爲孔丘。曰魯孔丘與、曰是也、曰是知津矣。問於桀溺。桀溺曰、子爲誰、曰、爲仲由。曰是魯孔丘之徒與。對曰然。曰、滔滔者天下皆是也、而誰以易之、且而與其從辟人之士也。豈若從辟世之士哉。耰而不輟。子路行以告。夫子憮然曰、鳥獸不可與同群、吾非斯人之徒與而誰與、天下有道、丘不與易也。

【讀方】　長沮桀溺耦して耕す、孔子之を過ぎて、子路をして津を問はしむ。長沮曰く、夫の輿を執る者は誰とか爲す。子路曰く、孔丘となす。曰く是れ魯の孔丘か。曰

く是なり。曰く是れ津を知らん。桀溺に問ふ。桀溺曰く、子は誰とか爲す。曰く仲由なり。曰く是れ魯の孔丘の徒か。對へて曰く然り。曰く滔々たる者天下皆是なり、而して誰と以にか之を易へん、且つ而其の人を辟くるの士に從はんよりは豈世を辟くるの士に從ふに若かんや。耰して輟まず。子路行て以て告ぐ。夫子憮然として曰く、鳥獸は與に群を同うすべからず、吾れ斯の人の徒に非ずして誰と與にせん、天下道あれば丘與に易へず。

【字義】○長沮桀溺、共に隱者○耦而耕、相並んで耕してゐた○津、渡船場○執與、手綱をとる○滔滔。水の流れてやまない貌○以、與に○而、汝○耰而不輟、まいた種にをかぶせてやめなかつた○憮然、失意の貌○斯人之徒、天下の人の仲間。

【義解】孔子が楚から蔡に反へる道に、長沮と桀溺が相並んで耕してゐたので、子路に渡場を聞かせた。すると長沮の曰ふには車の上で手綱をとつてゐるのは誰かときいたので子路は孔丘だといふと、それなら魯の孔丘か、そんなら彼は天下を周遊してゐる男だから渡場なども知つてゐる筈だといつて教へなかつた。そこで桀溺に尋ねると桀溺は「おまへは何といふのか」ときいたから仲由といふ者だと答へると、「然らば魯の孔丘の徒であらう。今や天下の勢は滔々として水の流れる如く亂れてやまない、この大勢を誰と共に變易しようとするのか。且つ汝は東奔西走して人に用ひられない人に從ふよりは、寧ろ高蹈遠退して世をさける人に從ふ方が賢いではないか」と。いつて、耰して種を覆ふ手をやめなかつた。子路はそのことを孔子に告げると悵然失意のさまをなして曰く、「世を離れて鳥獸と群居することは出來ない。同じく人類である天下の人々と共にするより外に生存の意義がない。天下道あれば我れ之を改善しようとするものではない。道がない故に改善變易しようと力めてゐるのである」と歎息された。

子路從而後、遇丈人以杖荷蓧。子路問曰、子見夫子乎。丈人曰、四體不勤、五穀不分、孰爲夫子、植其杖而芸。子路拱而立。止子路宿、殺雞爲黍而食之、見其二子焉。明日

子路行以告、子曰隱者也、使子路反見之、至則行矣。子路曰、不仕無義、長幼之節、不可廢也、君臣之義如之何其廢之、欲潔其身而亂大倫、君子之仕也、行其義也、道之不行已知之矣。

【讀方】子路從つて後る、丈人の杖を以て蓧を荷ふに遇ふ。子路問うて曰く、子夫子を見たるか。丈人曰く、四體勤めず五穀分たず、孰をか夫子とせん。其の杖を植て芸る。子路拱して立つ。子路を止めて宿す、雞を殺し黍を爲りて之を食はしめ、其の二子を見えしむ。明日子路行つて以て告ぐ。子曰く隱者なり、子路をして反つて之を見せしむ、至れば則ち行る。子路曰く、仕へざれば義なし、長幼の節廢すべからず、君臣の義之を如何ぞ其れ之を廢せん、其身を潔くせんと欲して大倫を亂る、君子仕ふるや其の義を行ふなり、道の行はれざる已に之を知る。

【字義】○丈人、老人のこと○蓧、竹で作つたかご○四體、手足○五穀、稻麥稷黍菽○植、立てる○芸、草をとる○拱、手をこまねいて敬禮する○大倫、ここでは君臣の義を指す。

【義解】子路が孔子に從つて旅行中後れたことがあつた。老人の籠を負つてくる者に遇つたから、夫子に遇はなかつたかと尋ねると、老人曰く「身體も勞せず五穀の見分けさへも出來ない者が何が夫子か」と知らん顏して草を刈つてゐた。子路は隱者なるを知つて敬禮を表した。すると老人は子路を呼びとめて、鷄肉の黍料理をして之に食はせ且つ己が二人の子をも子路にあはせた。明くる日孔子にあつて其の事を告げると、孔子は隱者であるといつて子路にかへつて尋ねさせたがその時はすでに去つた跡であつた。子路曰く「士は仕ふべき筈である、仕へないのは君臣の義を知らないからである。彼の隱者と雖も長幼の節序は廢することが出來ないのに、何で君臣の義をするために君臣の大義を亂るのは心得がたいことであらうか。其の一身を潔くするのは道の行はれないのを知つてゐるけれども義を行ふためである。君子の仕へるのは道の行はれざる」

逸民伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連。子曰不降其志、不辱其身、伯夷叔齊與、謂柳下惠少連、降志辱身矣、言中倫、行中慮、其斯而已矣。謂虞仲夷逸、隱居放言、身中清廢中權。我則異於是、無可無不可。

【讀方】逸民は伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連なり。子曰く、其の志を降さず、其の身を辱かしめざるは伯夷叔齊か、柳下惠、少連を謂ふ、志を降し身を辱かしむるも、言倫に中り、行慮に中る、其れ斯れのみ。虞仲夷逸を謂ふ、隱居放言するも、身は清に中り、廢は權に中る。我は則ち是に異り、可もなく不可も無し。

【字義】○逸民、遺逸の民で、世に漏れたる人○言中倫、いふこと倫理に當る○其斯而已矣、是れだけでよろしい○身中清、身の行は清潔に相當する○廢中權、世を廢てるも時の宜しきに適ふ。

【義解】世に用ひられない民が伯夷以下七人ある、孔子曰く「志を降さず身を辱しめない者は伯夷叔齊であつて、彼等は義の爲めに武王を諫め遂に首陽山に餓死して志節を全した。柳下惠少連の二人は志を降し身を辱しめたけれども言ふこと道に中り、行ふことが思慮にあつた。二人のとるべきはそれで十分である。虞仲夷逸は隱居放言して獨善主義を行つたが、身は清廉を保ち、退くも時の宜しきを得た。しかし私はそれ等の人々と異つて可もなく不可もなく、唯中道を行ふだけである。

大師摯適齊、亞飯干適楚、三飯繚適蔡、四飯缺適秦、鼓方叔入於河、播鼗武入於漢、少師陽擊磬襄入於海。

【讀方】大師摯は齊に適き、亞飯干は楚に適き、三飯繚は蔡に適き、四飯缺は秦に適き、鼓方叔は河に入り、播鼗武は漢に入り、少師陽、擊磬襄は海に入る。

【字義】○大師、亞飯、三飯、四飯、鼓方、播鼗、少師、擊磬、皆樂官の名○河、內○漢、漢中○海、東海の諸島。

【義解】魯が衰へ雅樂廢れるに及んで樂官の摯、干、繚、缺、叔、武、陽、襄等の人々が四方に散じた。

周公謂魯公曰、君子不施其親、不使大臣怨乎不以、故舊無大故、則不棄也、無求備於一人。

【讀方】周公魯公に謂つて曰く、君子は其の親を施てず、大臣をして以ひざるを怨みしめず、故舊は大故なければ則ち棄てず、備ることを一人に求むることなし。

【字義】○魯公、周公の子伯禽○施、すてる○以、用ひる○大故、惡逆。

【義解】周公が其子伯禽に語りて曰く「君子は其の親族同宗の者をすてず、大臣を信任して其の用ひられないことを怨みに思はしめず、朋友故舊はよほどの惡逆の事がなければ交をたゝない。又何人も一得一失のある者故に完全無缺を一人の人に求めないやうにするがよい」と。

周有八士、伯達、伯适、仲突、仲忽、叔夜、叔夏、季隨、季騧。

【讀方】周に八士あり、伯達、伯适、仲突、仲忽、叔夜、叔夏、季隨、季騧。

【義解】周の盛代には一人の婦人が伯達以下八人の有能の子を生んだことがあつた。しかし今は一人の有能の士を生む人も少くなつた。

子張第十九

此の篇すべて二十五章。

子張曰、士見危致命、見得思義、祭思敬、喪思哀、其可已矣。

【讀方】子張曰く、士は危きを見て命を致し、得るを見て義を思ひ、祭には敬を思ひ、喪には哀を思ふ、其れ可ならんのみ。

【字義】○致命、一命を差出す○得、利祿を得ること○祭、祖先の祭記○喪、父母親戚の死。

【義解】「士たる者は君父の危難に際しては一命を捧げて之に殉じ、利を得る場合には義に合ふか否かを察し、祖先を祭る場合には敬を盡し、父母親戚の喪には哀悼をきはめる。かくの如くにして士ということが出來る」と子張がいはれた。

子張曰、執德不弘、信道不篤、焉能爲有、焉能爲亡。

【讀方】子張曰く、德を執ること弘からず、道を信ずること篤からざれば、焉んぞ能く有りとせん、焉んぞ能く亡しとせん。

【義解】子張曰く「德を執り守ること狹く、道を信ずること薄ければかかる人の存在は國家のために何等の影響がない。かゝる人が有るといつても亡いといつても問題にはならない。」

子夏之門人、問交於子張。子張曰、子夏云何。對曰、子夏曰、可者與之、不可者拒之。子張曰、異乎吾所聞、君子尊賢而容衆、嘉善而矜不能、我之大賢與、於人何所不容、我之小賢與、人將拒之、如之何其拒人也。

【讀方】子夏之門人、交を子張に問ふ。子張曰く、子夏は何と云へる。對へて曰く、子夏曰く、可なる者は之れに與し、不可なる者は之を拒がん。子張曰く、吾が聞く所と異なり、君子は賢を尊んで衆を容れ、善を嘉して不能を矜れむ、我大賢ならんか、人に於て何ぞ容れられざる所あらん、我不賢ならんか、人將に我を拒がんとす、之を如何ぞ其れ人を拒がん。

【字義】○矜、憐れむ○交、交友の道。

【義解】子夏の門人が友に交はる道を子張に尋ねると、子張は、子夏は何と教へたかと尋ねかへした。門人曰く「我が師子夏の教へに、可なる善者とは交はり、不可なる不善者とは交はるなといはれた」と。子張曰く「私の夫子にきいた所と違ふ、君子は賢者を尊び善をほめ、多くの人を包擁してしかも不能者は之を憐憫してやるべきである。若しも我が大賢人ならば人に容れないことはなく、我が不賢ならば人を拒む前に人が拒み容れられないであらう」と。蓋し子夏の言は交友の道を狹く解し、子張は廣く解してゐる。王陽明は子夏は是れ小人の交を言ひ、子張は之れ成人の交をいふ、能く之を用ふれば亦俱に是なりといつてゐる。

子夏曰、雖小道、必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不爲也。

【讀方】　子夏曰く、小道と雖も、必ず觀るべき者あり、遠きを致し泥ひことを恐る。是を以て君子は爲さざるなり。

【字義】　○小道、小藝○致遠恐泥、あまり深入りすれば拘泥して廣く通じないことを心配する。

【義解】　子夏の曰く「一技一藝と雖も味はうべき者がある。しかし其の道は一方に偏してゐるから、あまり深入りしすぎると、偏狹に落ちて大體に通ずることが出來なくなる。故に天下國家を治める事業を成さうとする君子は、大道に志して小道を學ばないのである。

子夏曰、日知其所亡、月無忘其所能、可謂好學也已矣。

【讀方】　子夏曰く、日にその亡き所を知り、月に其の能くする所を忘るるなきは、學を好むといふべきのみ。

【字義】　○日知其所亡、未だ知らざる所を知る、即ち知新である、○月無忘其所能、已に知つたことをよく溫習し、即ち溫故。

【義解】　子張曰く「我が知らざる所を知り、已に知つたことをよく溫習し、日に月に勉強する者は學を好むといつてよい」

子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。

【讀方】　子夏曰く、博く學びて篤く志し、切に問ひて近く思ふ、仁其の中に在り。

【字義】　○博學切問、博く學んで切實に不審を問ふ、知の修養○篤志近思、道を修むる志篤く、我身に近く察して之を行ふ、行の修養。

【義解】　子夏曰く「博く學びて知を致し、篤く志して行を深め、切實に問ひて不審を正し、身に近づけて之を實行すれば、道熟して仁德自らなるであらう。」

子夏曰、百工居肆以成其事、君子學以致其道。

【讀方】　子夏曰く、百工肆に居て以て其の事を成し、君子は學んで以て其の道を致す。

【字義】　百工、諸〻の職人〇肆、官立の工場。

【義解】　子夏曰く「諸職人は官設の工場に入つて專心其の事に從事して、其の技藝を上達させる。士たる道を修むる君子も亦學に志して專心一意道學の蘊奥をさぐつて道を成就させるのである」

子夏曰、小人之過也必文。

【讀方】　子夏曰く、小人の過や必ず文る。

【義解】　子夏曰く「君子は過てば罪を自らに歸して、その非を改めるに躊躇しないが、小人は之に反して過てば必ず何とか理窟をつけて强いて其の非を文飾して過を蔽ひかくすことをつとめる」

子夏曰、君子有三變、望之儼然、卽之也溫、聽其言也厲。

【讀方】　子夏曰く、君子に三變あり、之を望めば儼然たり、之れに卽くや溫、其の言を聽くや厲し。

【字義】　〇儼然、莊重〇卽、近寄る〇厲、嚴正。

【義解】　子夏曰く「君子に三つの變化がある。遠くから之を見れば容貌莊重で恐るべきやうだが、之に近づいて見れば顏色溫和で恰も春風駘蕩たるが如く、しかも其のいふことをきけば、嚴正にして犯すことが出來ない」

子夏曰、君子信而後勞其民、未信則以爲厲己也、信而後諫、未信則以爲謗己也。

【讀方】　子夏曰く、君子は信ぜられて後に其の民を勞す、未だ信ぜられざれば則ち以て己れを厲ましむと爲す、信ぜられて後諫む、未だ信ぜられざれば則ち以て己れを謗るとなす。

【字義】　〇君子、位にある人〇勞、役する〇厲、病ます、苦痛を與へる。

【義解】　子夏曰く「上位にある君子は民に信用を得てから民を勞役に服せしむるがよい。若し信ぜられないですれば、たとへそれが民の爲になることでも、民はかへつて己れを苦しめるものだと考へる。又君子は君に信用を得てから諫めるがよい。若し

信用のない中に諫めれば、それがよい事でも君は自分を謗るものだと解釋するであらう」と。

子夏曰、大德不踰閑、小德出入可也。

【讀方】子夏曰く、大德は閑を踰えず、小德は出入可なり。

【字義】○大德、人倫の大節○小德、威儀容貌作法の小節○閑、欄で物の出入をとめる所。

【義解】子夏曰く「人倫の大義たる道德は一定の法則を越えて埒外に出ることを許さない。しかし威儀作法の如き小節目は場合により時によりて幾分の小出入があつても差支へはない」

子游曰、子夏之門人小子、當洒掃應對進退則可矣、抑末也、本之則無、如之何。子夏聞之曰、噫言游過矣、君子之道孰先傳焉、孰後倦焉、譬諸草木、區以別矣、君子之道、焉可誣也、有始有卒者、其惟聖人乎。

【讀方】子游曰く、子夏の門人小子は洒掃應對進退に當りては則ち可なれども、抑末なり、本は之れ則ち無し、之を如何せん。子夏之を聞きて曰く、噫言游過てり、君子の道は孰れをか先に傳へ、孰れをか後に倦まん、諸を草木に譬ふるに區して以つて別つ、君子の道焉んぞ誣ふべけんや、始めあり卒りある者は、其れ惟聖人か。

【字義】○洒掃、水をうち塵をはらふ○噫、あゝ、不平の聲○言游、子游のこと○倦、恐らく傳の誤であらう○區、別するの意○卒、終はり。

【義解】子游が子夏の門人を評して曰く「堂室を洒掃し、人に應對し、及び坐作進退の如き禮儀上の作法は觀るべきものがあるが之は禮の末節であつて、道の根本を會得してゐないやうである。即ち道の本たる正心誠意にかけて居るならば抑〻末である」と。子夏が之をきいて「子游の言は過つてゐる、君子が道を傳へるに本末があつて孰れを先に傳へ孰れを後にすべきかは順序があるのである。即ち洒掃應對の事を先にすべきである。且つ又草木に譬ふるにその種類によつて其の培養の法をかへなければなら

ぬ。君子の教ふる方法もその序に從ふべきで、之を末禮淺學といつて誣ゆる譯にはいかない。始終一貫本末の別なきは惟聖人のみである」

子夏曰、仕而優則學、學而優則仕。

【讀方】子夏曰く、仕へて優なれば則ち學び、學びて優なれば則ち仕ふ。

【義解】君に仕へて其の職務をつくし尚餘力あれば學を勉むるがよく、學んで十分に得る所あれば出でて仕へるがよい。學は知、仕は行で、ここに知行合一を期することが出來るのである。

子游曰喪致乎哀而止。

【讀方】子游曰く、喪は哀を致して止む。

【義解】子游曰く「父母の喪に居る時は、哀痛を極むればそれで十分である。徒らに文飾するは喪の眞義から遠ざかるものである。」

子游曰、吾友張也。爲難能也、然而未仁。

【讀方】子游曰く、吾友張や、能くし難きを爲す、然り而して未だ仁ならず。

【義解】子游曰く「我友の子張は志高遠、人の能くし難いことをなすものであるが、誠實の心に乏しい。以て仁者ということは出來ない」

曾子曰、堂堂乎張也、難與並爲仁矣。

【讀方】曾子曰く、堂々乎たり張や、與に並んで仁を爲し難し。

【字義】○堂々乎、盛大の貌。

【義解】曾子が子張を評して曰く「張は堂々たる威儀風采を備へてゐる。しかし外見を修むるに急で、內に內省して德を積むことが寡いから、與に仁をなすことかむづかしい」

曾子曰、吾聞諸夫子、人未有自致者也、必也親喪乎。

【讀方】曾子曰く、吾れ諸を夫子に聞けり、人未だ自ら致す者あらざり、必ずや親の喪か。

露光量違いの為重複撮影

【字義】○自致、自然の情を盡す。

【義解】曾子曰く「之は孔夫子からきいたことではあるが、人は何等修飾する所がないといふことは不可能のことであるが、たゞ親の喪のみは人情の自然の發露をつくして何等飾る所がない」と。

曾子曰、吾聞諸夫子、孟莊子之孝也、其他可能也、其不改父之臣、父之政、是難能也。

【讀方】曾子曰く、吾れ諸を夫子に聞けり、孟莊子の孝や、其の他は能くす可し、其の父の臣と父の政とを改めざるは是れ能くし難きなり。

【字義】○孟莊子、魯の大夫孟孫氏、名は速。

【義解】曾子曰く「私は孔夫子にきいたが、魯の大夫孟莊子の孝行は他のことは人が之を眞似ることが易いが、其の父獻子の用ひた臣をそのまゝ信任し、父の爲したる政事を其のまゝ行つたことは、實に眞似ることの出來ないことである」

孟氏使陽膚爲士師。問於曾子。曾子曰、上失其道、民散久矣、如得其情則哀矜而勿喜。

【讀方】孟氏陽膚をして士師たらしむ。曾子に問ふ。曾子曰く、上其の道を失ひて、民散ずること久し、如し其の情を得ば別ち哀矜して喜ぶ勿れ。

【字義】○孟氏、魯の大夫○陽膚、曾子の弟子○士師、獄官の長○散、民心離散して上を信ぜず○情、罪を犯すに至つた事情○哀矜、哀れむ○勿喜、犯罪の事情を探り得たことを誇り喜ぶな。

【義解】魯の大夫孟氏が曾子の弟子の陽膚を獄官の長としたので、陽膚は師の曾子に治獄の心得を尋ねた。曾子曰く「今や上位の者が政治の道を失ひ、民心乖散して上を信せずために法を犯す者が多い有樣である。故に罪を犯した事情を明らかにしたならば、宜しくその情狀をあはれみ酌量し、その探り得た手柄を誇るやうなことをするな」と。

露光量違いの為重複撮影

【字義】○自致、自ら自然の情を盡す。

【義解】曾子曰く「之は孔夫子からきいたことであるが、人は何等修飾する所がないといふことは不可能のことであるが、たゞ親の喪のみは人情の自然の發露をつくして何等飾る所がない」と。

曾子曰、吾聞諸夫子、孟莊子之孝也、其他可能也、其不改父之臣、父之政、是難能也。

【讀方】曾子曰く、吾れ諸を夫子に聞けり、孟莊子の孝や、其の他は能くすべし、其の父の臣と父の政とを改めざるは是れ能くし難きなり。

【字義】○孟莊子、魯の大夫孟孫氏、名は速。

【義解】曾子曰く「私は孔夫子にきいたが、魯の大夫孟莊子の孝行は他のことは人が之を眞似ることが易いが、其の父獻子の用ひた臣をそのまゝ信任し、父の爲したる政事を其のまゝ行つたことは、實に眞似ることの出來ないことである」

孟氏使陽膚爲士師。問於曾子。曾子曰、上失其道、民散久矣、如得其情則哀矜而勿喜。

【讀方】孟氏陽膚をして士師たらしむ。曾子に問ふ。曾子曰く、上其の道を失ひて、民散ずること久し、如し其の情を得れば別ち哀矜して喜ぶ勿れ。

【字義】○孟氏、魯の大夫○陽膚、曾子の弟子○士師、獄官の長○散、民心離散して上を信ぜず○情、罪を犯すに至つた事情○哀矜、哀れむ○勿喜、犯罪の事情を探り得たことを誇り喜ぶな。

【義解】魯の大夫孟氏が曾子の弟子の陽膚を獄官の長としたので、陽膚は師の曾子に治獄の心得を尋ねた。曾子曰く「今や上位の者が政治の道を失ひ、民心乖散して上を信せずために法を犯す者が多い有樣である。故に罪を犯した事情を明らかにしたならば、宜しくその情狀をあはれみ酌量し、その探り得た手柄を誇るやうなことをするな」と。

子貢曰、紂之不善、不如是之甚也、是以君子惡居下流、天下之惡皆歸焉。

【讀方】子貢曰く、紂の不善は是くの如く甚しからず、是を以て君子は下流に居ることを惡む、天下の惡皆焉れに歸す。

【字義】○下流、衆惡のあつまる所。

【義解】子貢曰く「殷の紂王とても世間でいふ程の惡人ではなかつたであらうが、惡いことは皆紂の所行として傳へられるやうになつた。則ち恰も水が下流に集るやうに衆惡が之に歸したのである。故に君子は下流の惡の集まる所に身をおいて惡名を得ることを避ける」

子貢曰、君子之過也、如日月之食焉、過也人皆見之、更也人皆仰之。

【讀方】子貢曰く、君子の過ちや、日月の食の如し、過つや人皆之を見る、更むるや人皆之を仰ぐ。

【字義】○日月之食、日蝕月蝕○更、改める○君子、上位者。

【義解】子貢曰く「君子の過失は日蝕月蝕の如く下民之を見る。しかも過ちを更むれば光明輝き出でて、人皆その德を仰ぐに至るのである」

衛公孫朝問於子貢曰、仲尼焉學。子貢曰、文武之道未墜於地、在人賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武之道焉、夫子焉不學、而亦何常師之有。

【讀方】衛の公孫朝子貢に問うて曰く、仲尼焉にか學べる。子貢曰く、文武の道未だ地に墜ちずして人に在り、賢者は其の大いなる者を識り、不賢者は其の小なる者を識る、文武の道有らざることなし、夫子焉くにか學ばざらん、而して亦た何の常の師か之れ有らん。

【字義】○公孫朝、衛の大夫○文武之道、文王武王の教○不賢者、衆人○識、記す。

【義解】衛の公孫朝が孔子はどこで何人について學問をされたかと尋ねた。子貢對へて曰く「周の文王武王の道は今や行はれないけれども、未だ地におちて亡びたといふわけではないから、人々に傳はつて殘つてゐる。故に賢者はその治道の大なるもの

を知り、衆人はその禮樂の小なる者を記憶してゐるので、夫子は賢不賢を擇ばず之れに就て學ばれた。故にどこといつて一定の學んだ所もなく、誰といつてきまつた師匠があつたわけではない」

叔孫武叔語大夫於朝曰、子貢賢於仲尼。子服景伯以告子貢。子貢曰、譬之宮牆、賜之牆也及肩、窺見室家之好、夫子之牆數仞、不得其門者或寡矣、夫子之云、不亦宜乎。

【讀方】　叔孫武叔大夫に朝に語つて曰く、子貢は仲尼より賢なり。子服景伯以て子貢に告ぐ。子貢曰く、之を宮牆に譬ふれば、賜の牆は肩に及ぶ、室家の好を窺ひ見る、夫子の牆は數仞なり、其の門を得て入らざれば、宗廟の美、百官の富を見ず、其の門を得る者或は寡し、夫子の云へる亦宜ならずや。

【字義】　○武叔、魯の大夫○數仞、仞は七尺○夫子、武叔をさす○室家之好、好は美しいこと。

【義解】　魯の大夫叔孫武叔が朝廷に於て同列の大夫に語つて、子貢は孔子よりも賢だといつた。子服景伯が之を子貢に告げたので、子貢は「之を家の垣根に譬へると、私の垣は人の肩程の高さで家の中のよいことが窺ひ見ることが出來るが、夫子の垣は數仞の高さで、其の門からはいらなければ到底その中の宗廟の壯麗、百官の盛列する有樣を見ることが出來ない。而して其の門に入つて見得る人は少い。故に武叔のさういつたのも無理はない」と。

叔孫武叔毀仲尼、子貢曰、無以爲也、仲尼不可毀也、他人之賢者丘陵也、猶可踰也、仲尼日月也、無得而踰焉、人雖欲自絕、其何傷於日月乎、多見其不知量也。

【讀方】　叔孫武叔仲尼を毀る。子貢曰く、以てする無かれ、仲尼は毀るべからず、他人の賢者は丘陵なり、猶ほ踰ゆべし、仲尼は日月なり、得て踰ゆることなし、人自ら絕たんと欲すと雖も、其れ何ぞ日月を傷まんや、多に其の量を知らざるを見る。

【字義】　○無以爲、毀るなかれ○他人の賢者、孔子以外の賢者○丘陵、をか○多、

まさに〇見其不知量、自己の地位分量を知らぬを見はす。

【義解】　叔孫武叔が孔子を誹謗したので子貢は曰く「仲尼を謗ること勿れ、他の賢者は丘陵の如きもので猶ほ踰ゆることが出來るが、仲尼に至つては、日月と同じでとても高くしてこえることは出來ない。かつその人が自ら日月と絶たうと思つても、日月は少しも痛痒を感ずることがない。たゞまさに謗る人自身の力量を知らないことを證するだけである。

陳子禽謂子貢曰、子爲恭也、仲尼豈賢於子乎。子貢曰、君子一言以爲知、一言以爲不知、言不可不愼也、夫子之不可及也、猶天之不可階而升也。夫子之得邦家者、所謂立之斯立、道之斯行、綏之斯來、動之斯和、其生也榮、其死也哀、如之何其可及也。

【讀方】　陳子禽子貢に謂つて曰く、子恭を爲す、仲尼豈子に賢らんや。子貢曰く、君子は一言以て知とし、一言以て不知となす、言愼まざるべからず、夫子の及ぶべからざるは、猶ほ天の階して升るべからざるが如し。夫子の邦家を得る者、所謂之を立つれば斯に立ち、之を道びけば斯に行き、之を綏んずれば斯に來り、之を動かせば斯に和す、其の生けるや榮え、其の死するや哀し、之を如何ぞ其れ及ぶべけんや。

【字義】　〇爲恭、恭敬にして師を推す〇階、梯子〇道、導く〇綏、安んず。

【義解】　陳子禽が子貢に曰ふに「子は恭敬して仲尼に及ばずといつてゐるが、實は仲尼は子に賢つてゐないであらう」と。子貢曰く「君子は一言にして人の智不智を知ることが出來る。故に言語は愼まねばならぬ。今日の子の言は子の不知をあらはすものではないか。さて孔子の及ぶことの出來ないのは天に梯子かけて升ることが出來ないと同じである。孔子の邦家を得て諸侯となり卿相となつたならば、古語に所謂生養の道を立つれば斯に人民は立ち、人民を善に導びけば、人民は之に從ひ、人民を愛撫すれば遠近の民來附し、禮を以て人民を動かせば民は相和する。生きては民の尊榮をうけ、死しては民これを悲しむ。孔子の德化かくの如くなれば、どうして之れに及ぶこ

とが出來ようか。

堯曰第二十

此篇すべて三章。

堯曰、咨爾舜、天之曆數在爾躬、允執其中、四海困窮、天祿永終。舜亦以命禹。曰予小子履敢用玄牡、敢昭告于皇皇后帝、有罪不敢赦、帝臣不蔽、簡在帝心、朕躬有罪、無以萬方、萬方有罪、罪在朕躬。周有大賚、善人是富。雖有周親不如仁人、百姓有過、在予一人。謹權量、審法度、修廢官、四方之政行焉。興滅國繼絶世、擧逸民、天下之民歸心焉。所重民食喪祭。寬則得衆、信則民任焉、敏則有功、公則說。

【讀方】堯の曰く、咨爾舜天の曆數爾が躬にあり、允に其の中を執れ、四海困窮せば天祿永く終らん。舜も亦た以て禹に命ず。曰く、予小子履敢て玄牡を用ひ、敢て昭らかに皇々たる后帝に告げん、罪あらば敢て赦さず、帝の臣蔽はず、簡ぶこと帝の心に在り、朕が躬に罪あらば、萬方を以てすることなけん。罪は朕が躬に在り。周に大なる賚あり、善人是れ富む。周親ありと雖も仁人に如かず。百姓過あれば予一人に在り。權量を謹み、法度を審らかにし、廢官を修めば、四方の政行はる。滅國を興し、絶世を繼ぎ、逸民を擧ぐれば天下の民心を歸す。重んずる所は民食喪祭。寬なれば則ち衆を得、信なれば則ち民任じ、敏なれば則ち功あり、公なれば則ち說ぶ。

【字義】○咨、感嘆詞、ああ○天之曆數、天の定めた順番○允執其中、允はまことに、中は中道○天祿永終、天から授かつた祿が長くたえるであらう○小子履、小子は謙遜語、小履は湯王の名○玄牡、黒いを牛○昭、あきらかに○皇皇后帝、皇は大后は上帝大なる上帝よの意○簡、えらぶ○萬方、天下の衆民○賚、賜物○周親、近しい親族○權量、秤と桝○法度、掟○逸民、人民中の高才の士。

【義解】堯が舜に位を讓るの言葉に「ああ舜よ、天命汝を以て帝王たらしめる、政をなすに過不及なき中道を行へ、若しも四海困窮すれば天より受けた祿は永く終る